

**旦棕遺跡第1次発掘調査概報**

1995

宇治市教育委員会

**巨椋遺跡第1次発掘調査概報**

1 9 9 5

宇治市教育委員会

## 序

本書は、平成3年度に市営旦椋住宅の建て替えに伴い実施しました、旦椋遺跡発掘調査の概要報告です。

宇治市では近年、宅地開発などが増加し、発掘調査件数も増えてきましたが、大久保地区では府営西大久保団地建設に伴う発掘調査以降、あまり調査が行われる機会がありませんでした。今回の調査は、大久保地区では初めての大規模な調査となりました。

調査の結果、予想を大きく上回る大量の遺構や土器が出土し、これまで全く知られなかった古墳時代から奈良時代の重要な遺跡であることがわかりました。それと共に、「和名抄」の栗隈郷に比定されている大久保の旧集落付近が、中世の環濠集落にとどまらず、それよりさらに古い時代から集落として利用されてきたことがわかりました。

本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史解明の一助となることを願うものです。

最後に、発掘調査の実施についてご理解・ご協力を頂きました方々をはじめとして、調査・整理期間中ご指導賜りました関係各位に対して、心よりお礼申し上げます。

平成7年3月

宇治市教育委員会  
教育長 岩本昭造

## 例 言

1. 本書は、京都府宇治市大久保町山ノ内3番地の1に所在する旦椋遺跡発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、宇治市営旦椋住宅の建て替えに伴うもので、調査経費は宇治市が負担した。
3. 本書で使用する方位は、座標北である。
4. 本書に収録する写真は、遺構写真については宇治市教育委員会撮影分を使い、遺物写真については写真家寿福滋氏の撮影である。
5. 本書の執筆は、荒川史（宇治市教育委員会）、橋本勝行（仏教大学学生）が行い、V—1—A・VII—1を橋本が、それ以外を荒川が担当した。
6. 本書の編集は宇治市教育委員会社会教育課が行い、実務を荒川が担当した。

# 本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
	1. 地理的環境	2
	2. 歴史的環境	2
III	調査経過	5
	1. 調査経過	5
	2. 調査体制	6
IV	遺構	7
	1. 古墳時代の遺構	7
	2. 飛鳥時代の遺構	13
	3. 奈良時代の遺構	13
	4. 中世の遺構	14
	5. その他の遺構	14
V	遺物	15
	1. SX01出土土器	15
	2. SX01出土円筒埴輪	27
	3. SK22出土土器	27
	4. SB02・03出土土器	28
	5. SD04出土土器	28
	6. SD13出土土器	28
	7. その他の土器	31
	8. 金属器	33
	9. 石製品	34
VI	まとめ	35
	1. 旦棕遺跡の変遷	35
VII	考察	38
	1. 宇治市出土の土師器甕についての覚書	38
	2. 旦棕遺跡と栗隈大溝	45

## 挿 図 目 次

第1図	且棕遺跡と周辺の遺跡	3
第2図	且棕遺跡と周辺の地形	4
第3図	現地説明会の状況	6
第4図	遺構平面図	8
第5図	トレンチ東壁セクション図	9
第6図	SX01・SX02実測図	10
第7図	SX01北部周溝内土器出土状況	11
第8図	SX01埴輪棺出土状態	11
第9図	SK22実測図	12
第10図	SB01実測図	13
第11図	SB02・03実測図	13
第12図	SK01出土遺物（土師器1）	18
第13図	SK01出土遺物（土師器2）	19
第14図	SX01出土遺物（土師器3）	20
第15図	SX01出土遺物（土師器4）	21
第16図	SX01出土遺物（須恵器1）	23
第17図	ヘラ記号をもつ土器	24
第18図	SX01出土遺物（須恵器2）	25
第19図	SX01出土遺物（須恵器3）	26
第20図	円筒埴輪	27
第21図	SK22出土土器	28
第22図	SB02・03, SD04・13出土遺物	29
第23図	出土遺物（1）	30
第24図	出土遺物（2）	31
第25図	出土遺物（金属製品）	32
第26図	出土遺物（石製品）	33
第27図	宇治市出土土師器甕流量表	39
第28図	宇治市出土土師器甕の使用痕跡図	41
第29図	栗隈大溝の諸説	47
第30図	地割にみる溝状区画	48

## 図版目次

- 図版1 且椋遺跡空中写真
- 図版2 (1) 調査前の状況 (北から)  
(2) 調査地全景 (北から)
- 図版3 (1) 調査地全景 (北から)  
(2) 調査地全景 (南から)
- 図版4 (1) SX01遺物出土状況 (南から)  
(2) SX01全景 (南から)
- 図版5 (1) SX01北部周溝内の陸橋と土器 (東から)  
(2) SX01北部周溝内土器出土状況 (北東から)
- 図版6 (1) SX01北部周溝内土器出土状態 (北東から)  
(2) SX01周溝土層断面 (南から)
- 図版7 (1) SX01南部周溝内埴輪棺 (南から)  
(2) SX01南部周溝内埴輪棺 (西から)
- 図版8 (1) SK22全景 (南西から)  
(2) SK22土器出土状態 (南から)
- 図版9 (1) SB01全景 (東から)  
(2) SB02・03全景 (南から)
- 図版10 (1) トレンチ北部の遺構 (北から)  
(2) SD13遺物出土状況 (南から)
- 図版11 (1) SD04遺物出土状況 (西から)  
(2) SK24鉄釘出土状況 (北から)
- 図版12 (1) SK06全景 (西から)  
(2) SD15土層断面 (西から)
- 図版13 SX01出土土器 (1)
- 図版14 SX01出土土器 (2)
- 図版15 SX01出土土器 (3)
- 図版16 SX01出土土器 (4)
- 図版17 SX01出土土器 (5)
- 図版18 SX01出土円筒埴輪・SK22出土土器
- 図版19 各遺構出土土器

图版20 (1) 金属器 (1)

(2) 金属器 (2)

图版21 金属器 (3)

图版22 (1) 金属器 (4)

(2) 石製品



## I はじめに

本報告は、市営旦椋住宅建て替えに伴い実施した、旦椋遺跡発掘調査の概要報告である。調査地周辺は、比較的開発が早かったため、本調査が行われるまでは本格的な発掘調査が全く行われておらず、埋蔵文化財包蔵地としてはわずかに大久保環濠集落と、かつての開発の際に破壊された数基の古墳の伝承が残されているのみであった。本調査も、大久保環濠集落遺跡として調査を開始したものである。

ところが調査開始と共に、古墳時代から奈良時代の遺構・遺物を検出し、中世の環濠集落とは全く性格を異にするものであることがわかった。そこで遺跡名を、調査地北西に隣接する旦椋神社にちなんだ旦椋遺跡とし、調査を進めた。

調査地周辺は、付近にある旦椋神社がかつては栗隈天神社と呼ばれていたことから、『和名抄』所載の栗隈郷に比定されている。また旦椋の地名は、校倉から転化したものとされ、『日本書紀』に見える栗隈県の屯倉との関連も指摘されている。

今回の調査における遺構密度の高さ、遺物量の多さは、こうした伝承を改めて見直すきっかけとなり、調査地周辺がかつての栗隈と呼ばれる地域における中心的集落の一つであることが明らかとなった。この結果を受けて、平成4年度には遺跡の範囲確認を目的とした調査を旦椋神社境内において実施した。この調査は小面積であったため、遺構の性格を明確にすることはできなかったが、今回の調査では出土しなかった平安時代の土器や瓦などが出土し、遺跡が長期間継続していたことや、寺院もしくは官衙が存在していた可能性も考えられるようになった。

なお、現地調査から本書刊行に至る間、多くの方々よりご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する。

## II 位置と環境

### 1. 地理的環境

宇治市南部から城陽市西部にかけて広がる宇治丘陵は、大阪層群からなっており、その地表面は地層の傾斜にしたがって西に傾いている。このため、丘陵上を流れる水流は東から西に向かい、そこに谷が刻み込まれる。宇治丘陵の西には木津川が形成した沖積平野があり、宇治丘陵と沖積平野の接点にはこれらの小河川によって形成された帯状の扇状地がある。

且棕遺跡は、これら小河川の中の名木川によって形成された扇状地上に位置する。宇治丘陵を南西に向かって流れる名木川は、現在調査地の東方で大谷川と合流し、流れを北西に変え、調査地の北方を西流しているが、かつてはそのまま南西に向かって流れていたらしい。このため調査地付近も北東から南西方向に緩やかに傾斜しており、調査地付近の標高は約20mを測る。

### 2. 歴史的環境

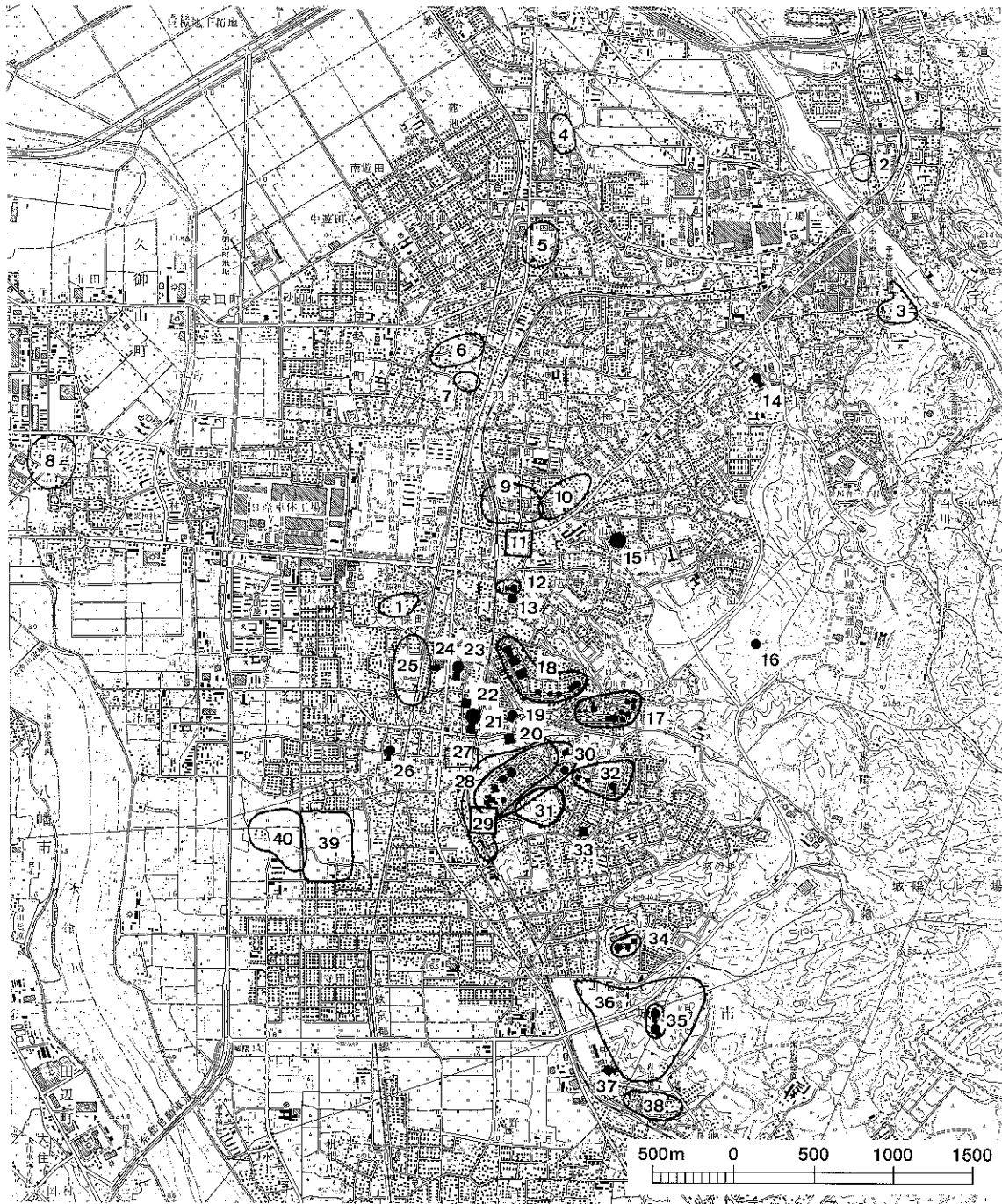
宇治市南西部から城陽市にかけての宇治丘陵とその下部の扇状地は、重要遺跡の密集する地域である。特に古墳時代の古墳群及び古墳時代後期以降の集落遺跡にそれが顕著である。とはいえ、断片的ながらも岩宿時代から縄文、弥生各時代の遺物・遺構も発見されており、この地域が人々の生活空間の中で重要な位置を占めていたことは間違いない。

岩宿時代の遺物は、城陽市芝ヶ原遺跡においてサヌカイト製のナイフ形石器と舟底形石器の2点<sup>(註1)</sup>が出土している。

縄文時代では、現在史跡に指定されている森山遺跡がある。森山遺跡は、縄文時代から古墳時代に至る複合遺跡であるが、縄文時代では後期中葉の時期を中心に6棟の竪穴住居跡を検出している<sup>(註2)</sup>。

弥生時代でも同じ森山遺跡で中期後半の竪穴住居跡を検出しているが、遺構として確認できているのはこのみである。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては、丘陵上に芝ヶ原12号墳<sup>(註3)</sup>や上大谷6号墳<sup>(註4)</sup>が築造される。定型的な前期古墳は、宇治丘陵の頂部近くに円墳の一本松古墳<sup>(註5)</sup>があり、ここから久津川古墳群の形成が始まったと見られている。一本松古墳以後は、宇治丘陵から派生する各尾根ごとに古墳群が形成されるが、城陽市域にある西山古墳群<sup>(註6)</sup>・尼塚古墳群<sup>(註7)</sup>・上大谷古墳群<sup>(註8)</sup>が規模の異なる古墳が密集するのにたいして、宇治市域にある庵寺山古墳<sup>(註8)</sup>、一里山古墳<sup>(註9)</sup>では明確な群を形成しない。今後の研究課題となろう。古墳時代中期になると、山城地域最大の規模を持つ車塚古墳を初めとする平川古墳群が、平野部にもっとも突出する大谷川の扇状地



第1図 旦椋遺跡と周辺の遺跡

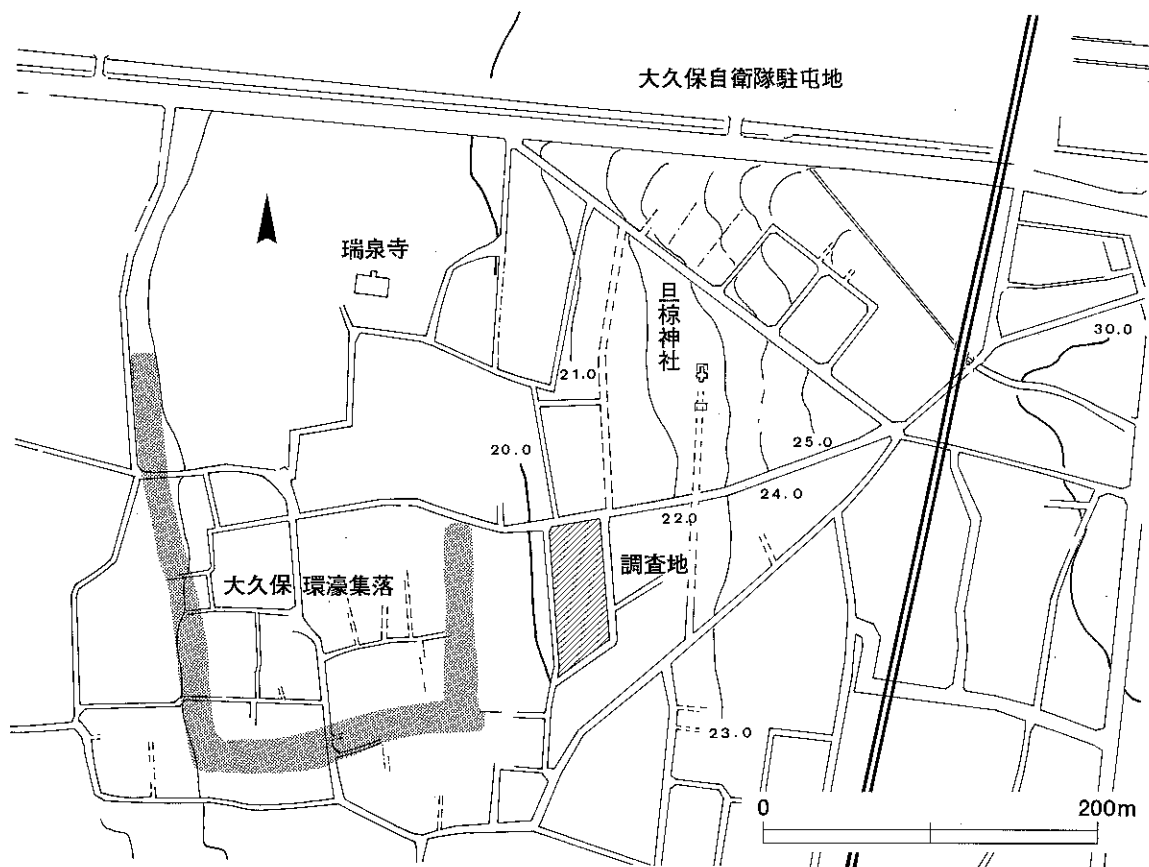
- 1. 旦椋遺跡 2. 乙方遺跡 3. 塔ノ川遺跡 4. 巨椋神社東遺跡 5. 神楽田遺跡 6. 若林遺跡 7. 若林墳墓群
- 8. 佐山遺跡 9. 一里山遺跡 10. 一里山古墳群 11. 広野廃寺 12. 坊主山古墳群 13. 金比羅山古墳 14. 丸山古墳
- 15. 庵寺山古墳 16. 一本松古墳 17. 上大谷古墳群 18. 西山古墳群 19. 丸塚古墳 20. 山道古墳 21. 車塚古墳
- 22. 梶塚古墳 23. 芭蕉塚古墳 24. 青塚古墳 25. 室木遺跡 26. 箱塚古墳 27. 平川廃寺
- 28. 芝ヶ原遺跡 29. 久世廃寺 30. 芝ヶ原古墳群 31. 正道遺跡 32. 尼塚古墳群 33. 尼塚古墳 34. 宮の平古墳群
- 35. 梅ノ子塚古墳群 36. 芝山遺跡 37. 長池古墳 38. 森山遺跡 39. 塚本東遺跡 40. 塚本遺跡

## II 位置と環境

上に形成される。しかしこれらの造墓活動も5世紀代で終焉をむかえる。古墳時代前・中期の集落については、弥生時代同様詳細は分からない。

6世紀代には前方後円墳である長池古墳<sup>(註10)</sup>、坊主山古墳群<sup>(註11)</sup>を除いては古墳の明確な状況はよく分かっていなかったが、芝山遺跡などで削平された円墳<sup>(註12)</sup>の検出があり、小規模な円墳が各地域で築造されているものと思われる。またこの地域では、横穴式石室を埋葬施設として採用しないことが大きな特徴である。6世紀代の集落は、前半期のものはまだ明確なものが少ないが、6世紀後半にはいと丘陵縁辺部で幾つかの集落が確認されている。特に前述した森山遺跡では、方形区画を持つ豪族居館と考えられる遺構が確認されている。

7世紀代にはいと、この地域の集落数は増え、また寺院の建立も盛んになる。寺院では、久世廃寺<sup>(註13)</sup>がまず建立され、ついで平川廃寺<sup>(註14)</sup>、広野廃寺<sup>(註15)</sup>と近接した地域に3か所の寺院ができる。また久世廃寺・平川廃寺の東側の丘陵には、久世郡衙<sup>(註16)</sup>と考えられている正道遺跡があり、現在史跡に指定されている。また、『日本書紀』推古天皇十五年の条には「山背国栗隈に大溝を掘る。」という記事が見える。この栗隈大溝に関しては、これをどこに比定するかについてはいくつかの説があるが、多くの議論の余地を残している。



第2図 巨椋遺跡周辺の地形（昭和30年の地形図に加筆）

### Ⅲ 調査経過

#### 1. 調査経過

宇治市建設部住宅課では、市内の老朽化した木造平屋建の市営住宅を、順次集合住宅形式に建て替える計画を進めている。その中で、平成4年度には宇治市大久保町山ノ内に所在する市営旦椋団地を建て替えることになった。当該地は、宇治市遺跡地図によれば大久保環濠集落遺跡の範囲にかかっており、事前の発掘調査が必要となった。そこで、旧住宅の解体の終了した平成3年12月16日から調査を開始することとなった。

調査前の段階においては、調査地周辺では過去に発掘調査が行われておらず、考古学的なデータはほとんどない状態であった。わずかに、隣接する旦椋神社境内から須恵器の台付長頸壺が採集されていること、調査地北側の立会調査で土師器片が採集されていることから、大久保環濠集落に伴う中世の遺構と、古墳時代の遺構が確認できることが予想された。

掘削は翌17日から開始し、土層の状況を知るためにトレンチ壁に沿って3か所の試掘を行った。その結果、トレンチ北部では地表下約1mほどで、付近の丘陵部で確認される赤褐色粘質土の地山層を確認した。しかしトレンチ南半部では約1.5mほど掘削しても認められず、大部分が河川の氾濫によるものと思われる砂質土層であった。そこでトレンチ南半部では遺構はないものと判断し、建物基礎の深さである地表下1.5mまで掘り下げ、掘削を進めた。ところが地表下約0.5mの地点で、円筒埴輪の完形品や須恵器壺の完形品が出土し、砂質土層中に遺構があることが判明した。詳細に断面を観察すると、砂質土層中に薄い黒色土層があることが分かり、この面をおって掘削を行った。

この黒色土層は、トレンチのほぼ全面に広がっており、当初は包含層と考えた。しかし一部断割を行った結果、遺構は黒色土上面から切っていることが判明し、黒色土層中での遺構の検出に努めた。精査の結果、トレンチ南部では古墳や、土墳墓が、北部では竪穴住居跡・ピット・溝があり、古墳周辺から北に向かって6～8世紀へと大まかな時期的な変遷があることが分かったが、遺構の切り合いが多く、それぞれの遺構の認識は困難を極めた。また、古墳の周溝をはじめとして大量の土器が出土し、掘削にも遅れを生じた。

一応の掘削が終了した平成4年3月12日、フォトバルーンによる写真測量を実施し、3月14日には現地説明会を実施した。現地説明会には約150名の参加があり、盛況の内に終わったが、翌日には市政40周年シンポジウムを控えての過密なスケジュールの中での現地説明会であった。

調査終了直前の3月19日、再度重機を搬入し、トレンチ北端部の断割を行った。それはこ

### Ⅲ 調査経過

の部分のみ遺構面の土層が不安定で、下層に遺構が存在する可能性があったためである。その結果、下層では河川の流路を確認し、流路の底からは古墳時代後期の須恵器の破片が出土した。これによって、調査地付近が飛鳥時代前後の時期に河川の付け替えをし、集落の拡大を図ったことが明らかとなった。調査はこの掘削で終了とし、24日全ての撤収を完了した。最終的な調査面積は、770㎡である。

#### 2. 調査体制

本調査に対する調査体制は下記のとおりである。

調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	同	社会教育課 主事	杉本宏
	同	社会教育課 主事	荒川史
調査事務局	同	参事	頼成綾子
	同	社会教育課 課長	池田正彦
	同	社会教育課 係長	吉水利明
	同	社会教育課 主任	山本敦子
	同	社会教育課 主事	前田暢

調査補助員……大下裕史・岡本泰典・瀬古正志・竹村 充・塚田 昇・西村恵祥・橋本勝行・長谷川陽子・浜中邦弘・福島孝行

調査整理員……足立千春・今井聡子・今西礼子・久保千恵子・桑原智子・佐野和恵・志村みどり・立花かおり・水谷美穂・宮川千代美・山岡弘美・山岡万里子



第3図 現地説明会の状況

## IV 遺 構

今回の調査では、古墳・土壙墓・溝・土壙・ピットなど多くの遺構を検出した。しかし遺構の切り合いが多く、また遺物量も多かったため、明確な遺構の性格、時期等を明らかにし得たものは少ない。特にトレンチ北半部ではそれが顕著である。第4図には最終的な遺構の検出状況を示しているが、遺構以外の部分でも多くの遺物が出土しており、本来はもっと多くの遺構があったものと思われる。また、例えば古墳の周溝においても、古墳時代から奈良時代に至る遺物が出土しており、ほとんどの遺構が同様の状態で遺物が出土している。このため、古墳や竪穴住居など性格の特定できる遺構については、一定の整理が可能であるが、溝・ピットなどについては明確にできない部分が多い。

このような状況の中、大まかに検出遺構をまとめると、トレンチ中央から南部にかけての古墳時代の古墳・土壙墓等の遺構、トレンチ中央部の竪穴住居などの飛鳥時代の遺構、トレンチ北部のピット・溝などの奈良時代の遺構に分けることができる。

トレンチ内の基本的な土層は、SX01北側周溝の周辺では、調査地より東部の丘陵地でも地山として確認できる黄褐色あるいは赤褐色の粘質土が地表下0.5 mで認められるが、トレンチ南半部では約1.5 m程度掘り下げても砂礫系の土層しか認められない。おそらく、調査地の中央から南側は埋没谷となっているものと思われる。

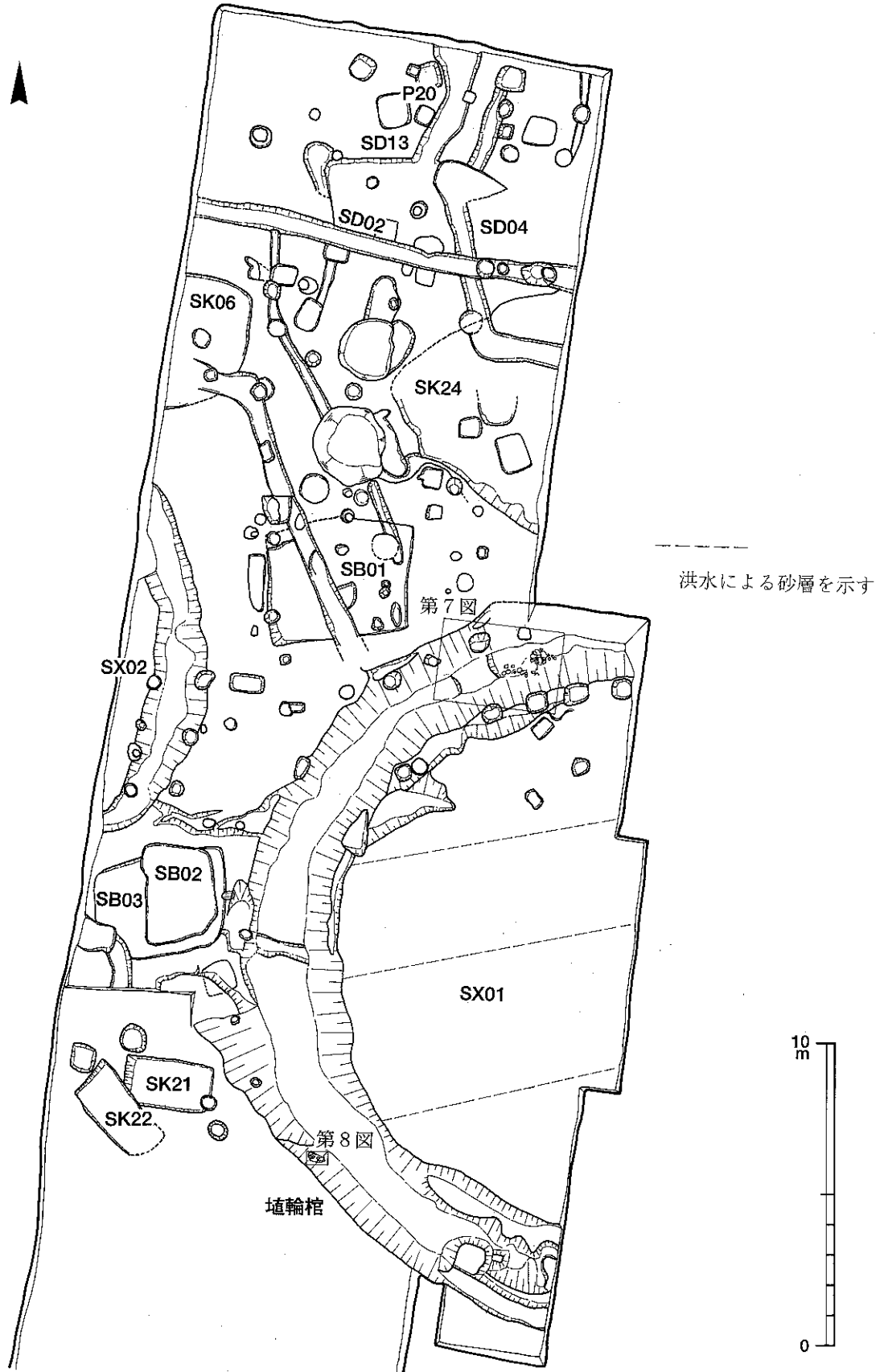
以下、時代ごとに遺構を概観して行く。

### 1. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には、古墳 SX01、SX02、土壙墓 SK22などがある。

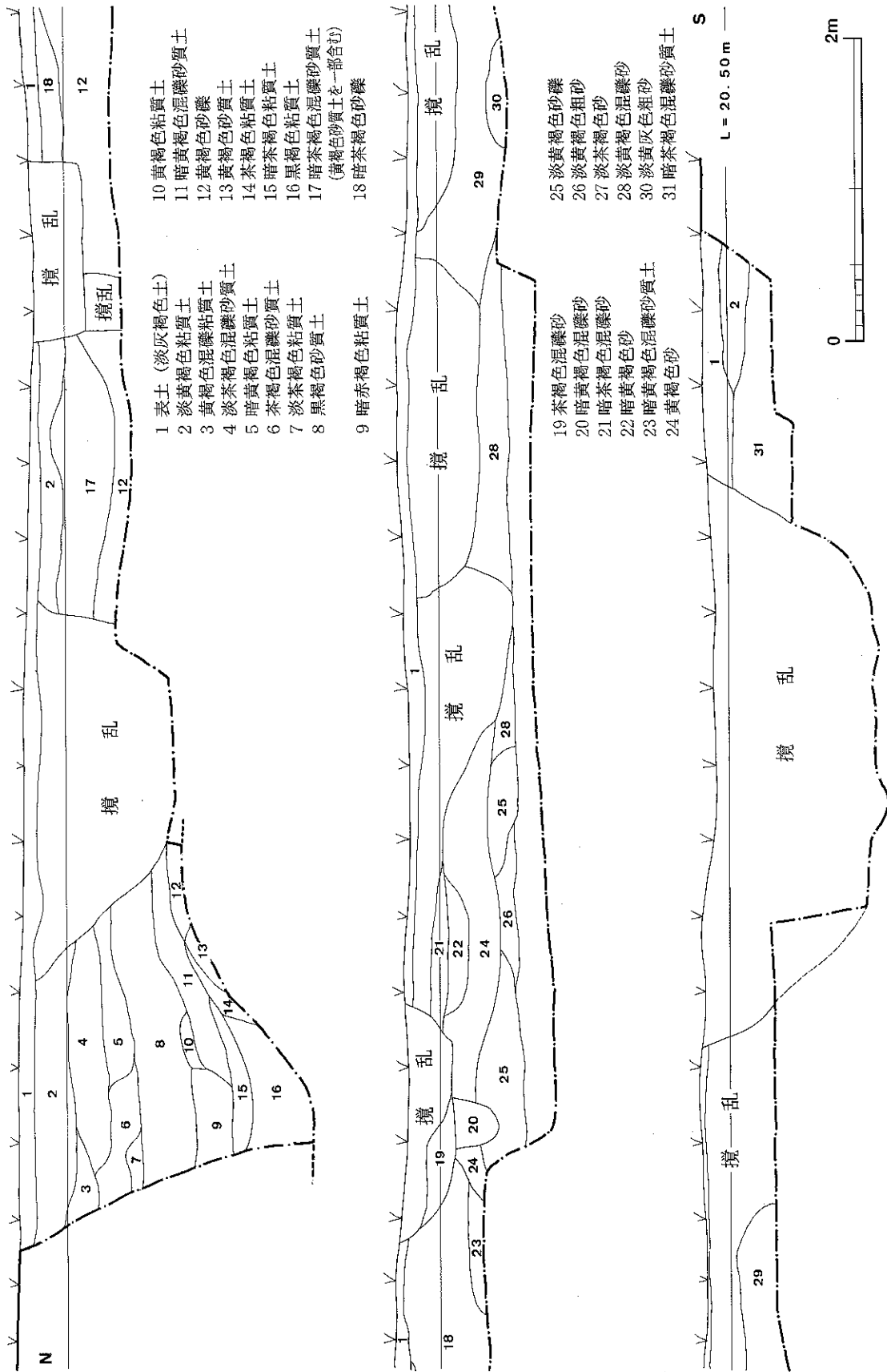
**古墳 SX01** (第6図) 古墳 SX01はトレンチほぼ中央部で検出した円墳で、古墳の西側半分を検出している。直径約20 mを測る。墳丘は削平を受けており、埋葬施設は残っていなかった。削平された墳丘側の肩から7世紀代の土師器が出土しており、削平を受けた時期が7世紀代であることが明らかになった。検出した古墳の墳丘面は、古墳築造時の地山と考えてよいだろうが、ほぼ全面に北東から南西方向に走る砂の層を検出した。このことから調査地が古墳築造以前の段階には、洪水に見舞われる環境にあったことが判断できる。トレンチ東壁の土層から判断すると、調査地の南側に流路があったものと思われる。なお、流路の方向から判断すると、この流路は名木川につながる可能性が高い。

古墳の周溝は、検出幅約3 m、深さ1.15 mを測る。溝内からは多量の土器が出土している。これらの土器は古墳時代から奈良時代のものまでであるが、最下層から出土した土器は古墳時代のものが多く、また完形品が多い。おそらく7世紀代に古墳が削平された段階に、埋葬施

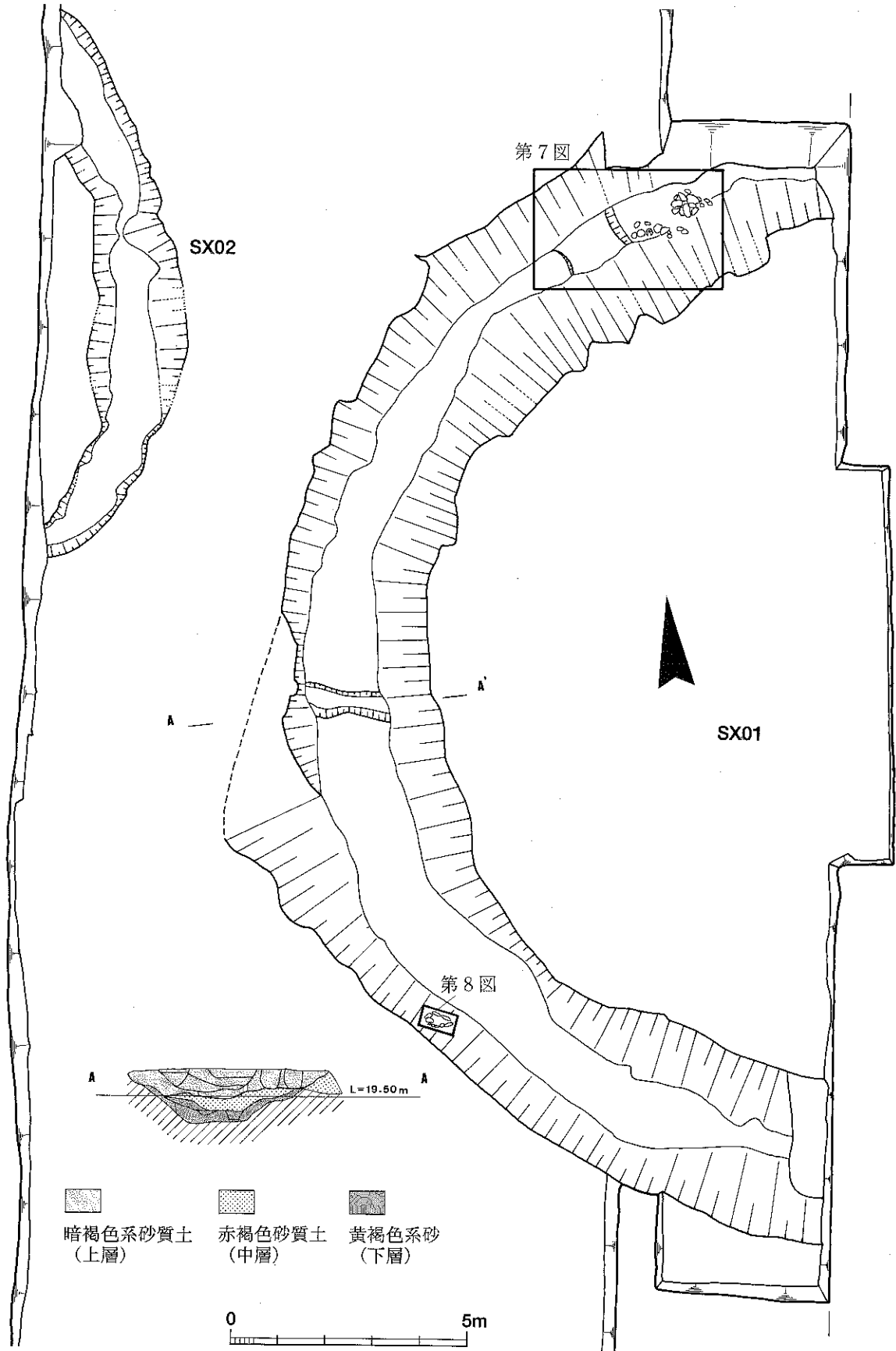





第4図 遺構平面図





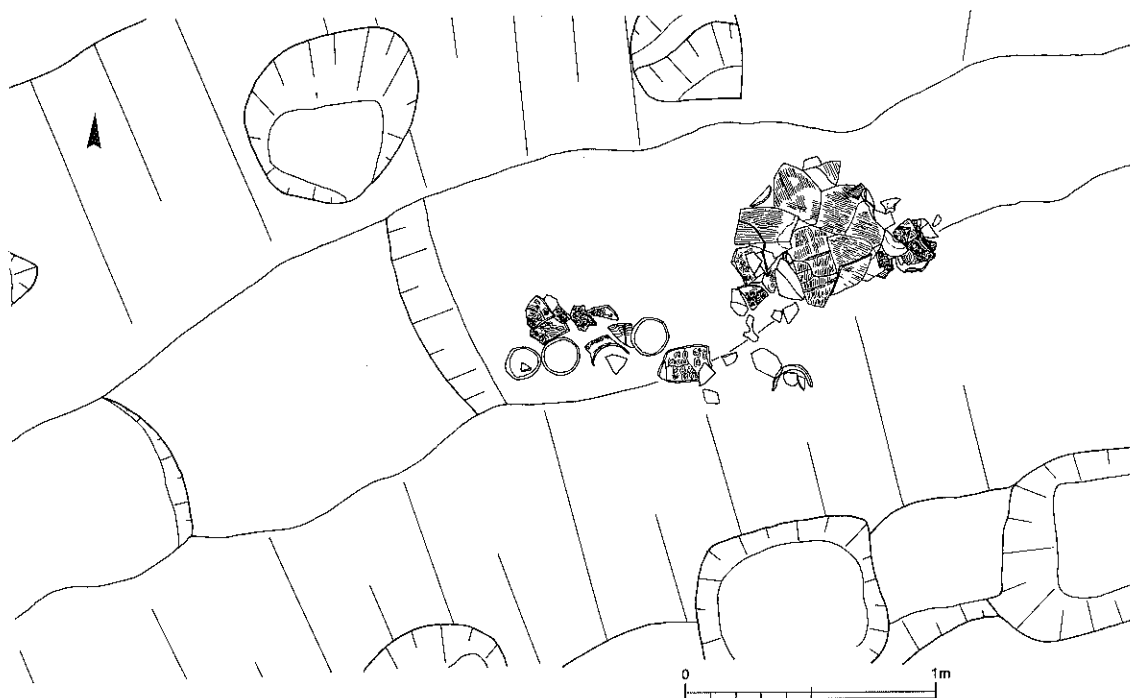
第5図 トレンチ東壁セクション図



 暗褐色系砂質土 (上層)	 赤褐色系砂質土 (中層)	 黄褐色系砂 (下層)
--	--	--

0 5m

第6図 SX01・SX02実測図



第7図 SX01北部周溝内土器出土状況

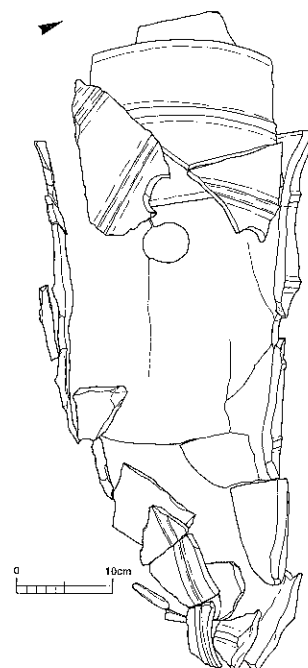
設に副葬された土器が溝の中に埋め込まれたものと思われる。ただ土器については大量に出土しているが、石材が認められないことから、埋葬施設は横穴式石室ではなく、直葬系の施設であった可能性が高い。

古墳北側の周溝底では、掘り残して一段高くした地点がある。この地点の横の溝底には、須恵器の杯3点と甕が置かれた状態で出土している。(第7図) 出土状況から判断すると、古墳祭祀に関する遺物であり、すぐ横の掘り残しは陸橋としての機能を持っていたものと思われる。

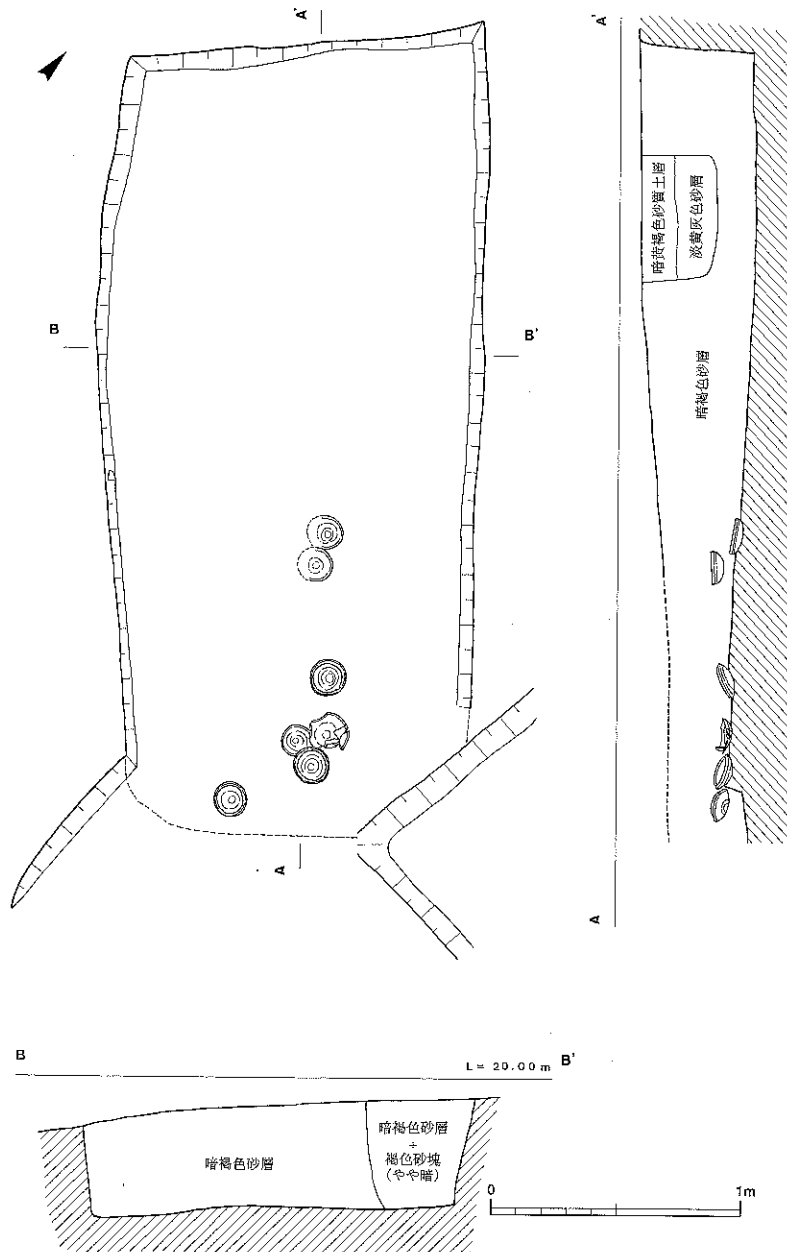
また溝内からは埴輪棺が1基検出されている。(第8図) 円筒埴輪2個体をつないで置き、小口を別の個体の円筒埴輪片でふさいだものである。全長0.7m。大きさから見て幼児棺であろう。

**古墳 SX02** SX01の西側にある。周溝のごく一部のみを検出のため明確ではないが、1辺9mの方墳と考えられる。

**土壇墓 SK22** (第9図) SX01の西側で、SX02の南側にある土壇で、長さ3.3m、幅1.5m、深さ0.45mを測る。土壇内からは須恵器の杯身3点、杯蓋4点、壺1点が土壇の南半部から出土している。土壇の形状や土器がほぼ完形であることなどか



第8図 SX01埴輪棺出土状態



第9図 SK22実測図

ら、土壙墓と考えられる。

出土土器のうち、杯蓋2点は土壙のほぼ中央に分かれており、杯蓋2点と杯身3点がややまとまって出土している。壺については図示していないが、土壙の南コーナーからの出土である。杯身1点を除く土器が、土壙の中軸線上にあり、全ての土器が口縁を上にした状態で出土している。土器の出土レベルは、1点を除いて土壙底に接している。出土状況から判断すると、大きく移動したものとは思えないため、棺内に置かれたものであろうか。そうであるならば、棺内のどこに置かれたかが問題となるが、土壙中央の杯蓋2点以外は、被葬者の足元に置かれたものと考えられる。

**土壙 SK21** SK22の北に

ある土壙で、SK22とほぼ同様の規模を持つ。SK22によって切られている。土壙内からは遺物が出土していないため、明確な時期や性格は不明であるが、形状から判断すると土壙墓である可能性がある。

**溝 SD15** トレンチ北端部の奈良時代遺構面の下層で検出した溝である。調査最終日に確認したため、詳細な調査ができていないが、埋土の状況から判断すると河川の旧流路と考えられるが、河川堆積層と地山層との境がほぼ垂直の線で分かれるため、人工の流路と考えられる。トレンチ内では流路の南岸を検出したのみであるため、明確な規模は不明である。埋土中からは古墳時代後期と思われる須恵器の甕の破片が出土しており、SX01が築造された

段階には流路として機能していたものと思われる。

## 2. 飛鳥時代の遺構

飛鳥時代の遺構には竪穴式住居などの遺構がある。この他の遺構としては、SX01周溝内に小型の土師器甕を、口縁を下にして据え付けたものが2ヶ所で確認された。甕の周囲には隅丸方形の焼土があり、移動式カマドを据え付けたものと考えている。

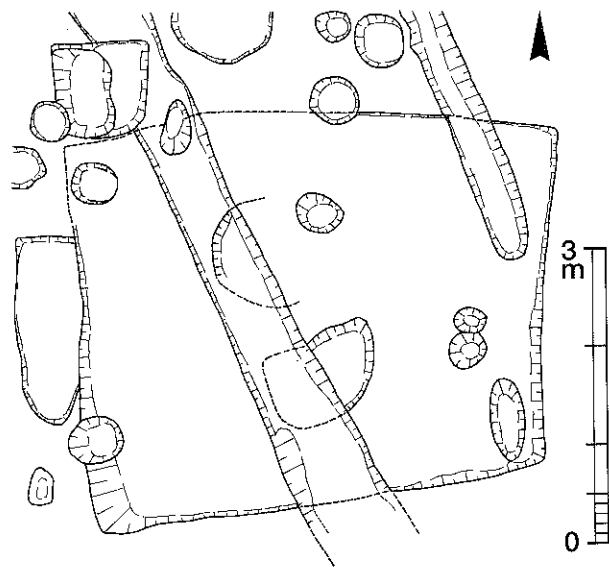
**竪穴式住居 SB01 (第10図)** トレンチのほぼ中央で検出した竪穴式住居である。東西約4.6m、南北約4mを測る。遺存状態は悪く、残存高は0.11~0.15mである。住居の床面ではいくつかのピットや土壌を検出しているが、住居に伴うものかは判別できない。

**竪穴式住居 SB02・SB03 (第11図)** SX01の西にあり、周溝にほぼ接する位置で検出した竪穴式住居である。SB03は東西約4.5m、南北約3.1m、残存高0.15mを測る。東壁中央部において、長径約0.4m、短径約0.3mの楕円形を呈する焼土を検出しており、その中央で土師器の完形の甕が口縁を下にして伏せた状態で出土している。SX01周溝内で検出した甕と同様の状況であることから、移動式カマドを据えたものか、あるいは炉として使用したものであろう。

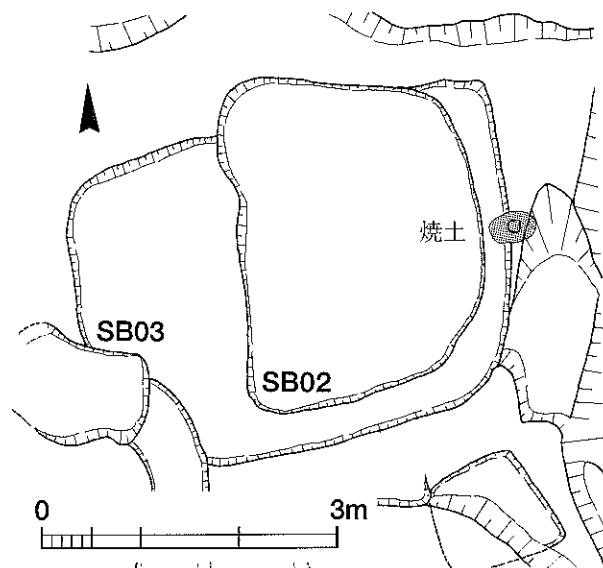
SB02は、SB03を切って造られている住居である。不整な隅丸方形を呈しており、南北約3.2m、東西約2.5m、残存高0.05mを測る。柱穴等は検出していない。別の性格の遺構である可能性も考えられるが、ここでは竪穴式住居としておきたい。

## 3. 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、溝・土壌・ピットなどがある。ピットは多数検出しているが、掘立



第10図 SB01実測図



第11図 SB02・03実測図

柱建物を復元することはできなかった。

**溝 SD04** トレンチ北部で検出した溝で、「く」の字状に屈曲する。幅0.6m。

**溝 SD13** トレンチ北部で検出した南北方向の溝である。幅0.9～1.5m。

#### 4. 中世の遺構

**溝 SD02** 今回の調査地の中では唯一の中世の遺構で、トレンチ北部にある東西溝である。埋土も他の遺構とは異なり、明確に区別することができた。幅約0.8m、深さ約0.3mを測る。

#### 5. その他の遺構

これまで遺構の性格や分布状況から3つの時期に分けて述べてきたが、いずれにも判別しかねる遺構もある。

**土壙 SK06** トレンチ北西部で検出した方形の土壙である。遺構の西半部がトレンチ外に出ているため、明確な規模等は明らではない。土壙内からは粘土塊と焼土を検出しており、炉のようなものである可能性が高い。調査段階では、性格を明らかにすることはできなかったが、周辺から鉄滓が出土していることから考えると、鍛冶に関するものかもしれない。

**土壙 SK24** トレンチ北東部で検出した不定形の土壙である。ここからは須恵器・土師器などの土器類の他に、鉄釘一束が出土している。

## V 遺 物

今回の調査では、コンテナ約80箱の遺物が出土している。これらの中では須恵器・土師器の土器類が大部分を占めるが、その他では鉄鏃・耳環・鉄滓などの金属製品、磨石などの石器類もある。以下各遺構ごとに遺物を概観して行く。

### 1. SX01出土土器 (第12図～第19図)

SX01からはコンテナ約60箱の遺物が出土している。土器は須恵器・土師器があるが、古墳時代後期から奈良時代のものまでを含む。このうち古墳時代後期の土器は主に下層から出土しており、須恵器の割合が多い。土師器にはわずかに古墳時代の土器があるが、飛鳥時代から奈良時代の土器が大半を占める。1点のみ二重口縁を持つ土師器が出土しているが、この時期に当たる遺構は今回の調査では検出していない。

#### A. 土師器 (第12図～第15図)

供膳形態では、杯C・杯A・皿B・鉢・高杯、煮沸形態では、鍋・甕・甑がある。このほか古式土師器の壺が1点出土している。精選された緻密な胎土とヘラミガキ・暗文を特徴とするいわゆる「律令的土器様式」<sup>(註17)</sup>の流れをくむものは、すべて上層から出土している<sup>(註18)</sup>。なお以下の記述において、特に断らない限り器種名・調整手法・法量区分は、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』、および『平城宮発掘調査報告 XI』に準ずる。

杯C (1～6) は、法量区分により杯CⅠ (5・6) 杯CⅡ (2～4) 杯CⅢ (1) に分けられる。これらはいずれも体部から口縁部にかけて内湾気味にのびるものである。端部の形態は丸くおさめるもの (4) のほかはいずれも内傾する面をもつものである。また1～3は内面に沈線を有する。外面には、上半ナデ・下半不調整の (1) を除きいずれも上半ヘラミガキ・下半ヘラケズリを施す。内面は、斜放射状一段暗文のもの (1～4) 斜放射状二段暗文のもの (5・6) がある。

杯A (7～9) は、いずれも体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がったのちに外反するものである。端部は強く巻き込むもの (7・9)、軽くつまみあげるもの (8) がある。外面の調整は、b0手法 (7)・b1手法 (8)・a3手法 (9) がある。内面調整には、斜放射状一段暗文・ラセン暗文を施すもの (8・9) と暗文をもたないもの (7) がある。7は口径12.8cm、器高3.2cm。8は口径15.8cm、器高3cm。9は口径17cm、器高3.8cm。

皿B (10) は、脚部～皿底部の破片である。脚部は外反し、端部を丸くおさめる。皿部外面に、國下分類のRt類に相当するヘラまたは爪を原体とする爪形状圧痕がある<sup>(註19)</sup>。

鉢 (11～13・18) は、杯C・杯Aに比べて大型の砂粒を含み粗いもの (11～13) と精良な

胎土を有するもの(18)に分けられる。この両者は系統を異にするものと思われる。11~13はいずれも丸底の体部から内湾気味にのびる口縁部をもち、端部をまるくおさめる。11は、外面にタテハケを施し、内面を板状工具により平滑になでる。12・13はともに外面上半にタテハケ、内面にヨコハケ、外面下半にヘラケズリを施す。11は体部外面の中位にススが集中して付着し、口縁部付近が赤変している。しかし底部にはわずかしかススが付着しない。内面には炭化物が付着している。11は口径12.4cm、器高5.6cm。12は口径14.4cm、器高6.8cm。13は口径14cm、器高9.1cm。18は、内湾気味にのびる口縁をもち、端部は内傾する。外面にはヘラミガキを施すものの一部に粘土紐継ぎ目痕や指頭圧痕を残す。内面には斜放射状二段暗文を施す。

高杯(14~17・49)は、全形のわかるもの(14・49)、軸部から脚部の破片(15)、杯部の破片(16・17)がある。14は、ほぼまっすぐに外上方にのびる杯部をもち端部が内傾する。杯部の内外面にはハケ調整を施す。外面のタテハケは線状にナデ消されている箇所がある。15は中空の軸部から外反する脚部をもち端部は丸くおさめる。軸部内面にはしほり痕を有する。16は内面に斜放射状二段暗文を施し、17は内面に斜放射状一段暗文を施す。49は脚部外面に9面の面取りをするものである。杯部外面にはヘラケズリを施し、内面には斜放射状一段暗文とラセン暗文を施す。

鍋(19~22)は、いずれも丸みをおびた体部から外上方に外反する口縁部をもつ。端部は、外傾するもの(19)、丸くおさめるもの(20)、内傾するもの(21)、内面につまみあげるもの(22)がある。いずれも体部内外面にはハケ調整を施す。19・20・22の口縁部から体部外面にかけてススが付着する。また22の内面には「×」状のヘラ記号が2つ刻まれている。

甕(23~45)は44を除いて把手をもたないものである。大部分は口縁部付近のみの破片であるが、全形をうかがえる資料も図示した中に6点ある。

従来の分類は、把手の有無や胴部の形態からみたものであり、それぞれの分類の中の形態差が大きいことや異なった機能のものを含み込んでいる可能性を指摘できる。ここでは甕の機能を重視する立場から法量を主な視点として以下のように分類した。(法量表は第27図)

- A 27のような長胴・丸底の甕。器高が口径を大きく上回るA Iと球胴に近いA IIがある。
- B 44のような球胴・丸底の甕。体部最大径部分に把手をもつものがある。
- C 41のような球胴・丸底の甕。
- D 39・40のような口径と器高があまり変わらない球胴・丸底の小型甕。

このほかにA~Dに含まれないものも存在する。これらは将来の資料数の増加を待つて再分類したい。以下、各形式ごとに特徴を記載していく。



甕A (25~33) は、ほぼ全形のうかがえるもの (27) を除いてすべて口縁部付近の破片である。口縁部はいずれも内湾するものであり、端部の処理の仕方により、内傾する面をもつもの (25・28・29)、内傾する面に沈線をもつもの (26・31・32)、丸くおさめるもの (27・33) にわけられる。調整は、体部外面にタテハケを施したのちに部分的にヨコハケを施すもの (26・33) を除いて体部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。ススはいずれも体部外面に付着するものの口縁部までは及ばない。また口縁部内面に「×」(28)「≠」(30)のヘラ記号を施すものもある。27は口径21.9cm、推定高40cm。

甕B (44) はほぼ全形をうかがえる資料である。口縁部は内湾したのち内傾する面をもつ。調整は体部外面上半にタテハケ、内面にヨコハケ、外面下半にヘラケズリを施す。把手は、体部最大径部分に挿入法によりつけられ上面に切り込みをもつ。口径26.6cm、推定高30.5cm。

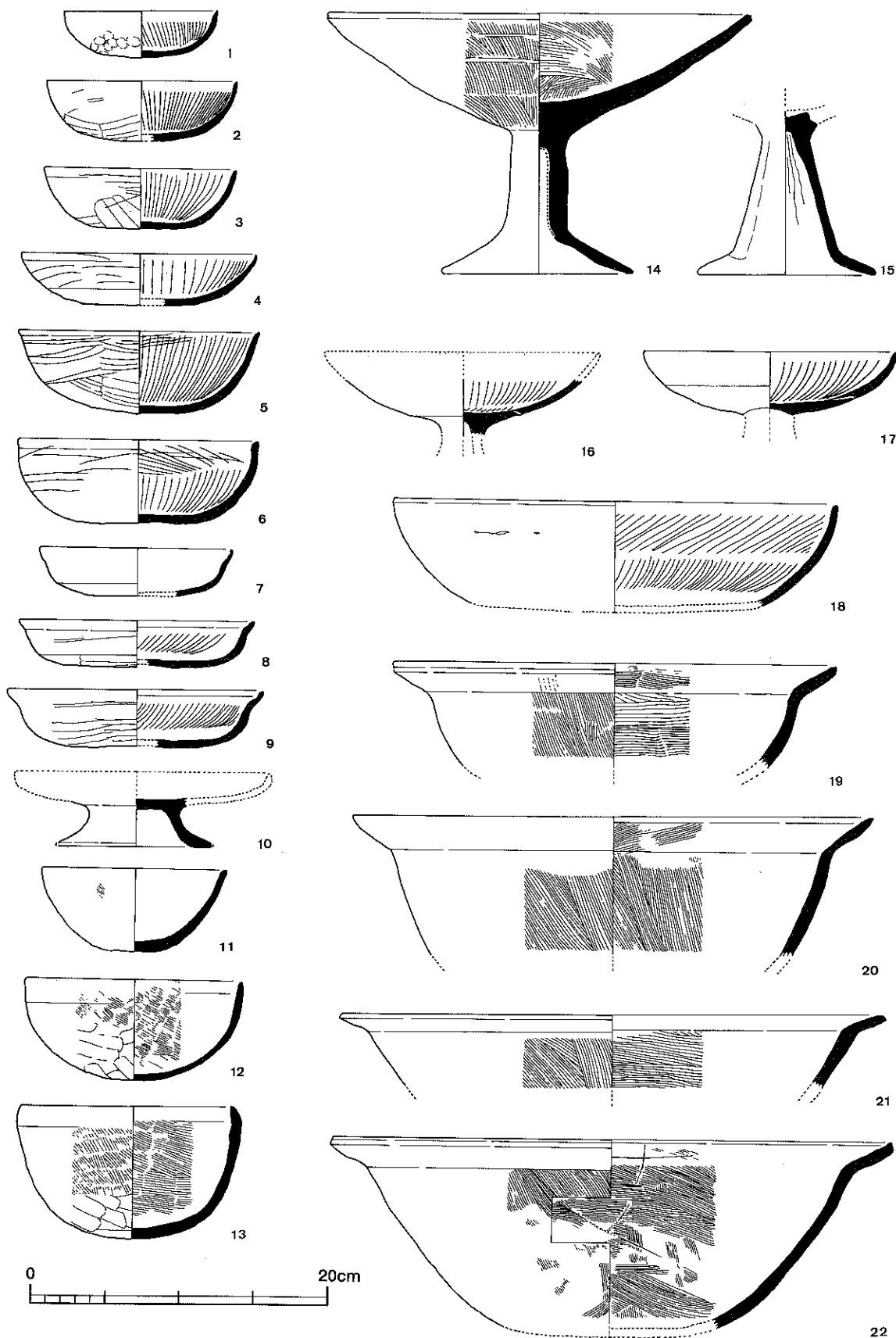
甕C (41) は全形を推定できるものである。口縁部は内湾したのち端部を丸くおさめる。調整は体部外面上半にタテハケ、内面にヨコハケ、外面下半にヘラケズリを施す。体部外面にススが付着する。口径21.8cm、推定高22cm。

甕D (23・24・34・35・39・40・43) は、全形をうかがえる39・40を除いて口縁部付近の破片である。口縁部の形態は、内湾したのち端部を丸くおさめるもの (43)、外上方にのびたのち内面につまみあげるもの (35・40)、水平に近い面をもつもの (34)、上外方にのびたのちまるくおさめるもの (23・24・39) にわけられる。調整は体部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施すもの (23・24・34)、体部外面に粗いタテハケ、内面にナデを施すもの (35)、体部外面上半部にタテハケ、下半ヘラケズリ、内面に板状工具によるナデを施すもの (39)、体部外面上半および内面にナデ、体部下半にヘラケズリするもの (43) がある。43は頸部にススが付着する。39は口径12cm、器高12.5cm。40は口径13.9cm、器高14.6cm。43は口径17cm、推定高18cm。

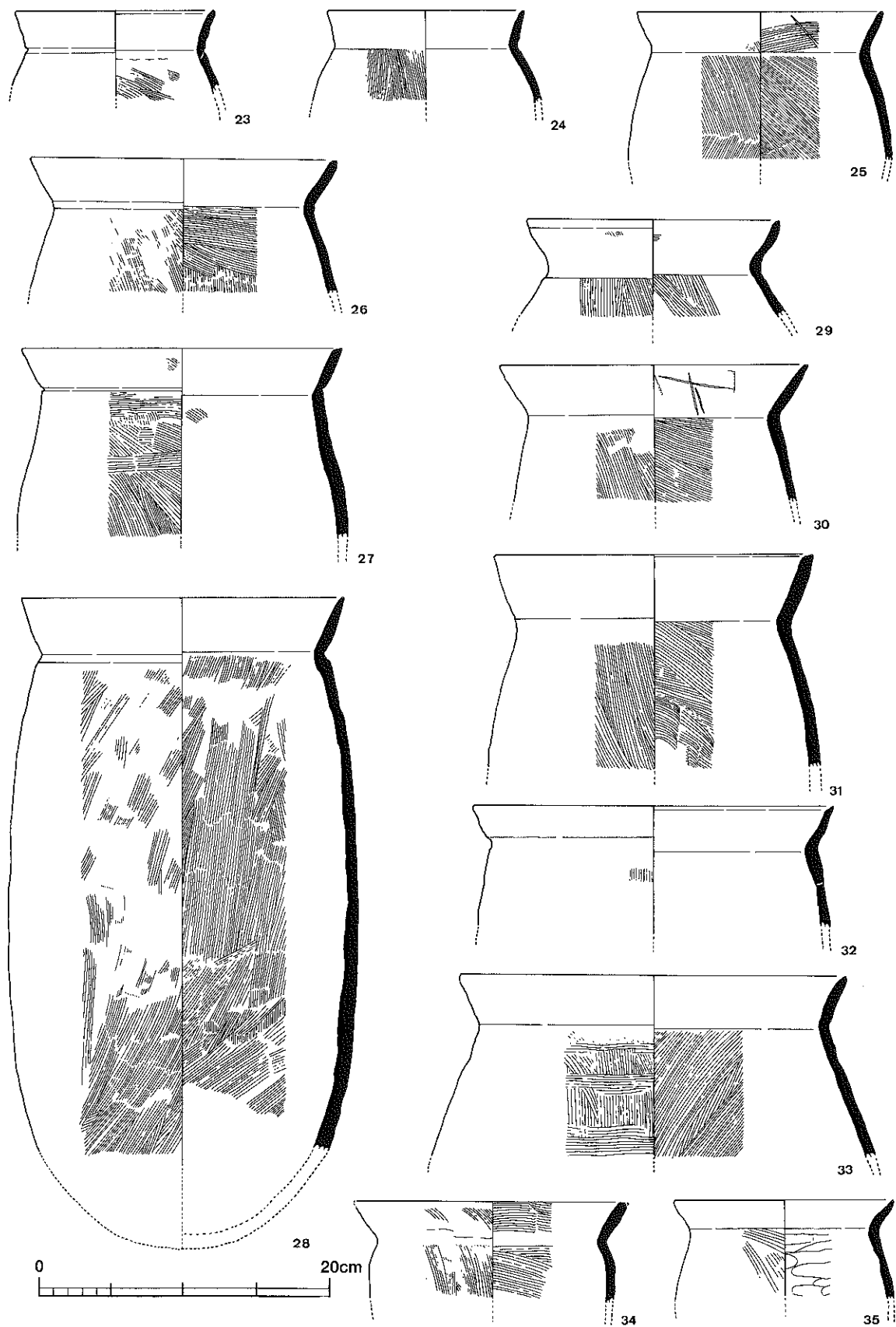
このほか以上の分類におさまらないものを5点図示している。36は上外方にのびる口縁をもつ破片である。端部は内面につまみ上げる。調整は、内外面とも摩滅のため不明。37は内湾気味に上外方にのびる口縁部をもつ破片である。端部はまるくおさめる。調整は内外面ともにハケ調整を施す。これらの特徴は甕Aに類似するものの器壁の薄い点が異なる。38は外湾する口縁部をもつ破片である。端部は内湾気味にまるくおさめる。摩滅のため外面の調整はわからないものの、内面は下から上にヘラケズリを行う。42は外反する口縁部の破片である。端部は丸くおさめる。45は内湾する口縁部をもつ小型のものである。甕Bに比しても法量が小さいため壺の可能性も考えられる。

甗 (47・48) は、全形をうかがえるもの (47) と口縁部付近の破片 (48) がある。47は円筒状を呈し、体部外面の中位に貼り付け法による一对の把手をもつ。底部には2孔の蒸気孔

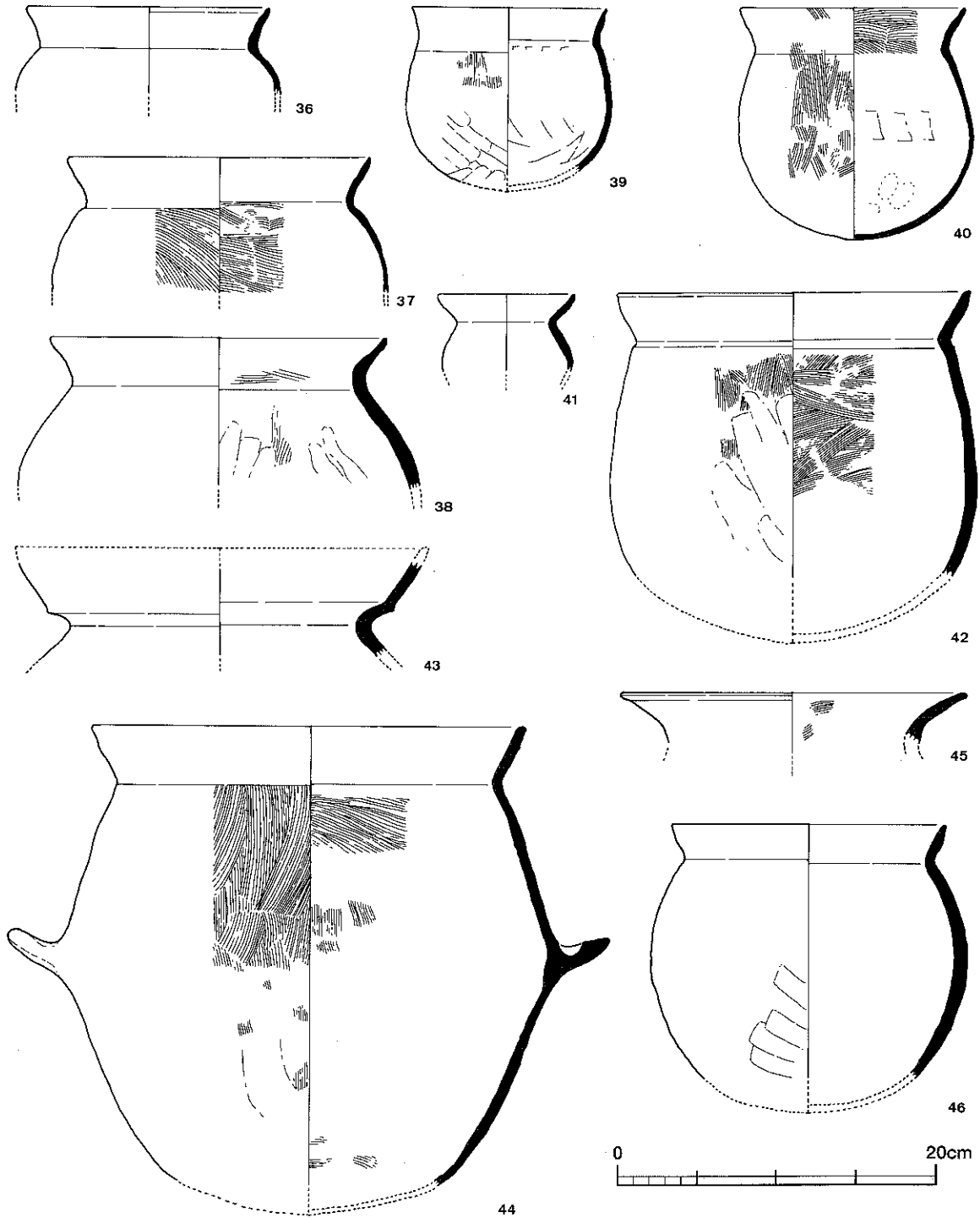
V 遺 物



第12図 SK01出土遺物（土師器1）

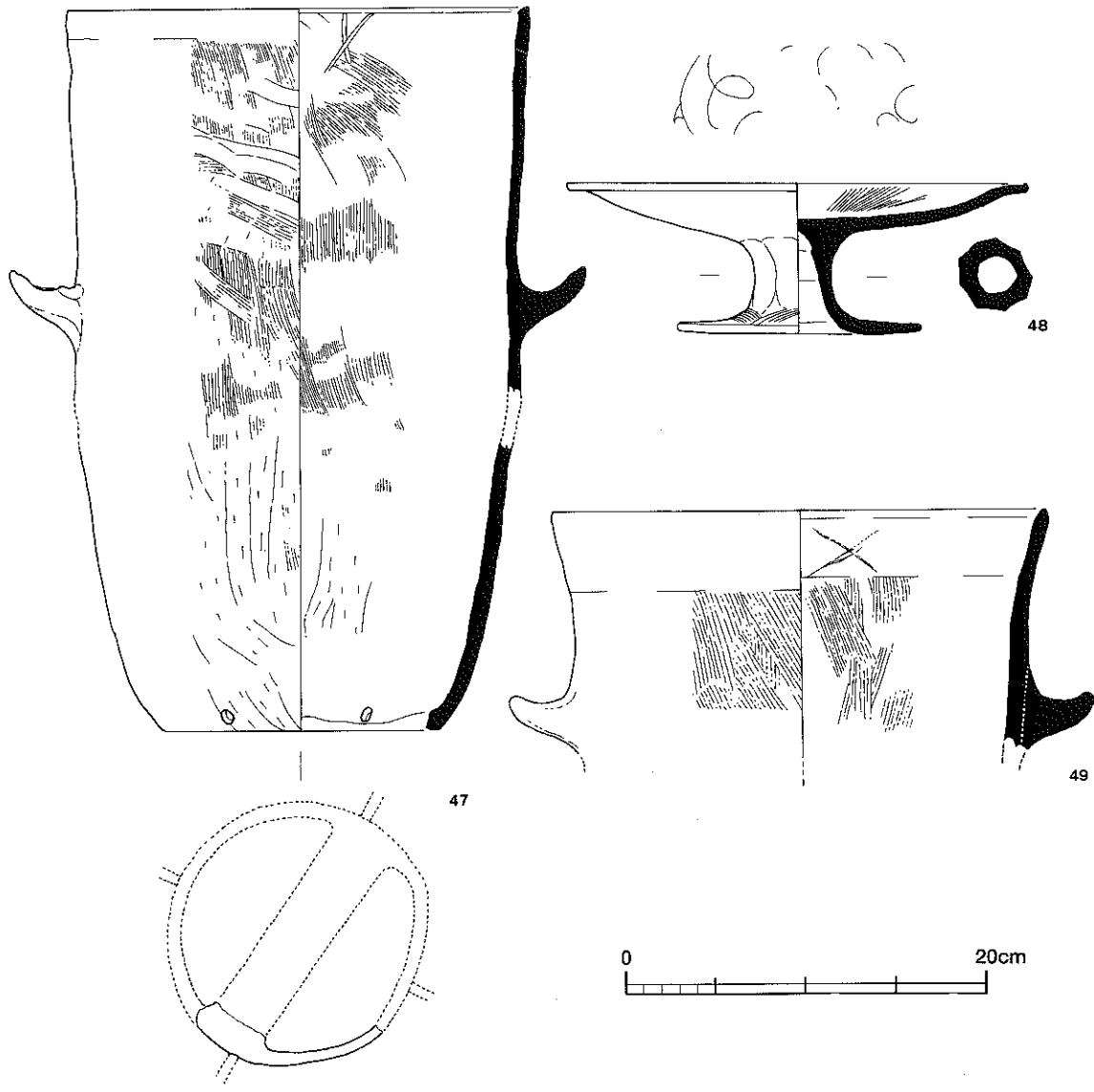


第13図 SK01出土遺物 (土師器2)



第14図 SX01出土遺物（土師器3）

をもつほか、棒状の棧をわたすための小円孔を現状で2孔もち、本来は4孔もっていたと思われる。口縁部は直立気味、端部は内傾する面をもつ。調整は、内外面ともに上半部にタテハケを、下半部にヘラケズリを施す。48は、わずかに外方に開く口縁部をもつものであり、端部は内傾する面に凹みをもつ。把手は貼り付け法によりつけられる。調整は内外面ともにタテハケを施す。また口縁部内面に「X」（47・48）のヘラ記号をもつ。47は口径26.4cm、



第15図 SX01出土遺物（土師器4）

器高40cm。

古式土師器壺（46）は、二重口縁の受部の破片である。小破片であるため全形をうかがうのは困難である。

以上の遺物の年代観は、都城出土土器との比較から以下のように考えられよう。1～6・  
(註20) 15～17は飛鳥池 SD809 出土のものと類似することから飛鳥Ⅰ～Ⅱ期、18は藤原宮 SD1901 出  
(註21) 土の鉢Aに類似することから飛鳥Ⅳ期、10は藤原宮 SD1400 出土のものに類例があることか  
(註22) ら平城宮Ⅰ期、8・9は、内面に斜放射状一段暗文を施すことから平城宮Ⅲ期に、7は暗文  
 をもたないもののb手法を用いていることから平城宮Ⅲ～Ⅳ期の所産と考えられる。

B. 須恵器 (第16~19図)

須恵器には杯・高杯・甗・平瓶・提瓶・脚付椀・壺・甕(註23)があり、陶邑編年のⅡ期からⅣ期までのものがある。

杯には、杯Hと杯G・杯A・杯Bがある。

杯H (第16図50~71、第17図) の身では直径13cm前後の一群 (56~59)、12.2~12.4cmの一群 (60・61、67~69)、10.6~11cmの一群 (70・71) がある。前二者には基本的に外底面ヘラケズリを施す。最も小型の一群には、ヘラケズリを施すものと、ヘラ起こしのまま不調整のものがある。大型の一群の中にはごくわずかではあるが、内底面に同心円の当て具痕を残すものがある。蓋には口径14~15cmの一群、13cm前後のもの、11cm前後の一群がある。最も大型の一群には、天井部の肩に稜の名残の凹線を残す。

杯Hには、蓋では天井部に、身では外底面にヘラ記号を持つものがある (第17図)。TK209型式の杯には「×」と「一」の2種類がみられる。TK217型式の杯蓋には「||」の1種類がある。

杯G (72・73) では、身に良好な資料が少ないが、蓋2点を図示した。口径は10.5~11cmである。宝珠つまみを持つ。天井部はヘラケズリを施すものと施さないものがある。

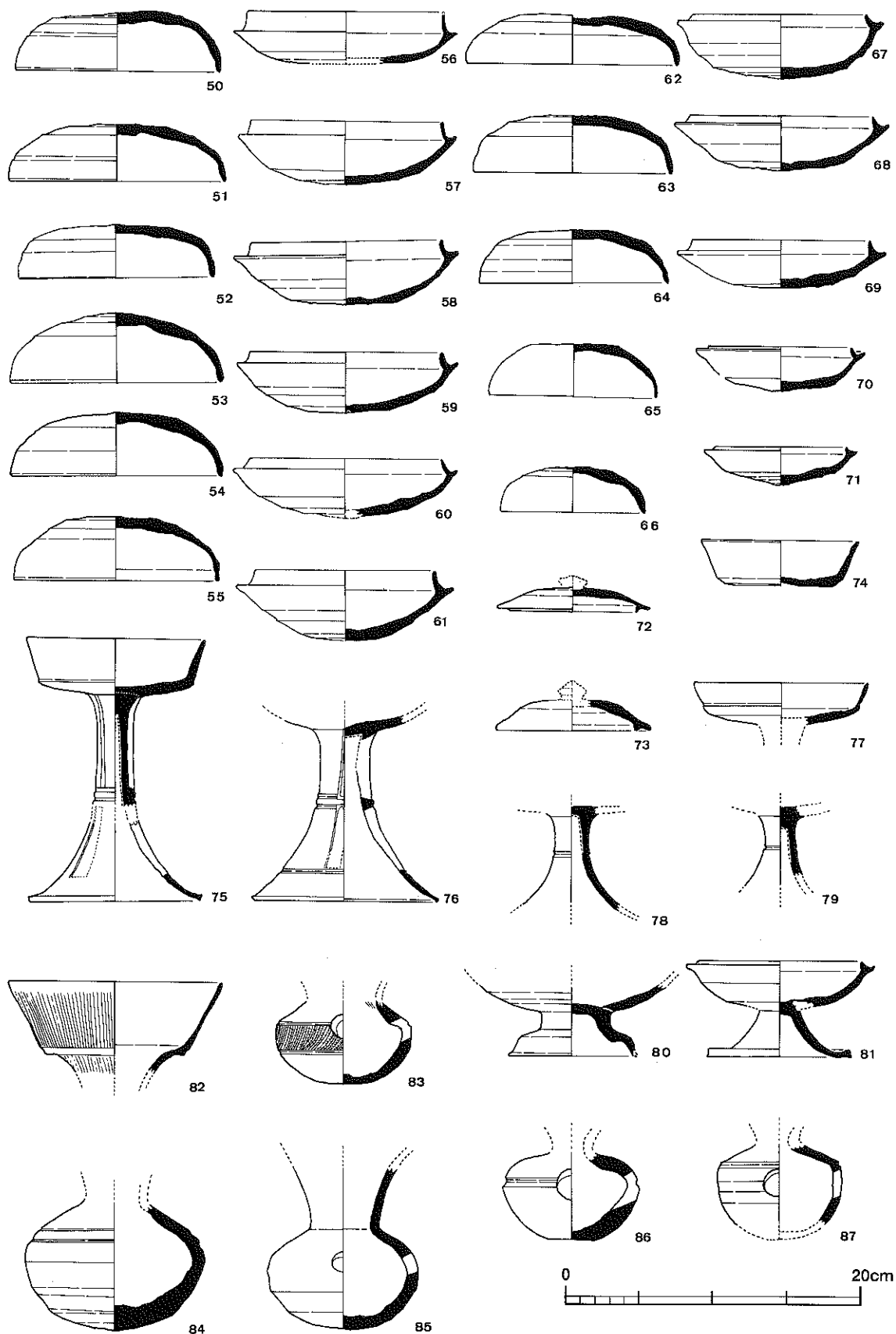
杯A (74・93) は2点を図示した。74は口径10.4cm、器高3.1cm。93は口径12.8cm、器高3.6cm。

杯B蓋 (第18図89~92) には、内面にかえりを持つものと持たないものがある。89は口径15.5cm、90は口径19cmである。かえりを持たないものは、口縁端部があまり屈曲しない笠形の形態である。91は口径15.6cm、92は18.5cmである。杯B身 (94~96) には口径13.5cmから17cmのものまでである。

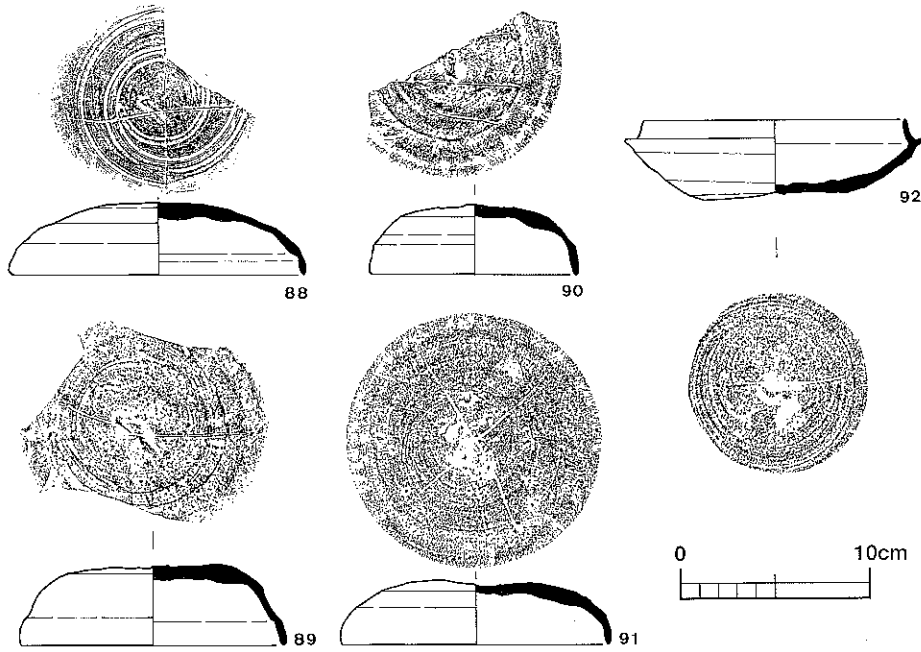
高杯 (75~81) は、長脚で2段の方形透かしを持つものと、短脚のものがある。短脚の高杯には無蓋と有蓋がある。短脚の有蓋高杯は、脚の形態が異なっており、外反して広がる脚を持つものと(81)、脚の中程で外方に屈曲し内湾する形態のもの(80)がある。無蓋高杯の脚部は透かしを持たず、脚部中央に1条の沈線を施す。

甗は、体部の最大径が12cmのもの、10cm前後のもの、9cm前後のものがあり、時期差を反映しているものと思われる。84は体部の最大径が最も大きいもので、肩部には2条の沈線を巡らす。底部は回転ヘラケズリを施す。85は中型のもので沈線等はない。83・86・87は小型のもので底部に回転ヘラケズリを施さない。肩部に1条の沈線を施すもの、体部中央に1条の沈線を施すもの、体部中央に2条の沈線を施し、その間にヘラ状工具による刺突文を施すものがある。

平瓶は、いずれも口頸部のみ3点を図示し得た (97~99)。口縁形態は、ほぼ直立するも



第16图 SX01出土遺物 (須恵器1)



第17図 ヘラ記号をもつ土器

の (98)、やや内湾気味のもの (97)、外方に広がるもの (99) と様々である。提瓶 (104) は 1 点ある。肩部には半円形の把手を持つ。体部の片面はロクロナデの後カキメ、片面はヘラケズリを施す。

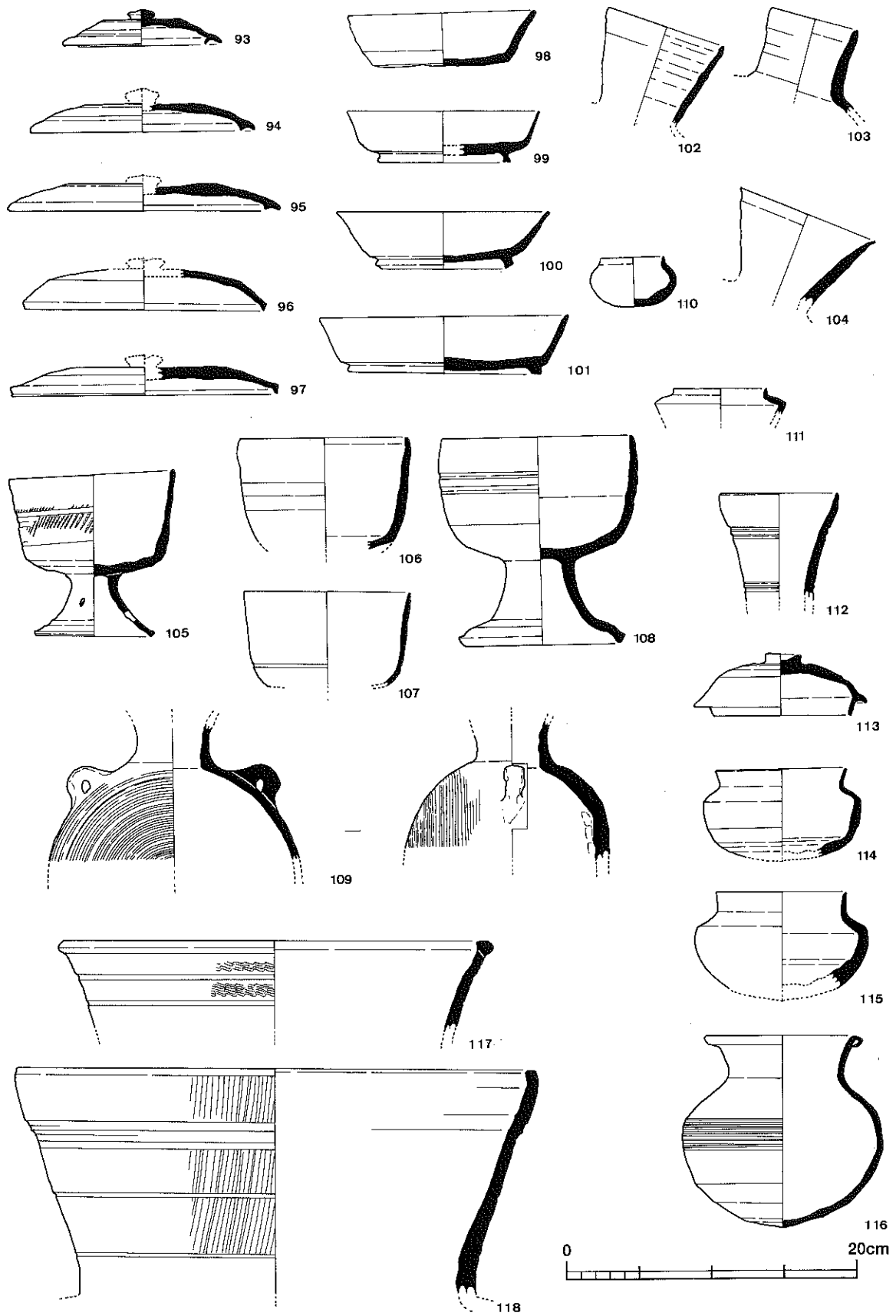
脚付椀 (100~103) は 4 点を図示した。口縁は内湾気味のものが多い。100は体部中央に楯状工具による刺突文と 2 条の沈線を持つ。脚は緩やかに外反し、3 方に円形透かしを持つ。102は体部下半に 1 条の沈線を持つ。103は体部中央に 2 条の沈線を持つ。脚部は中ほどで外反し、脚端部は内湾する。

壺には、小壺、短頸壺、長頸壺がある。105は短く立ち上がる口縁部を持ち、体部は丸みを持つ。これに比べ106は強く屈曲する肩を持つ。107は長頸壺の口頸部である。内湾気味の口縁を持ち上下 2 段に 2 条の沈線を持つ。108・109は短頸壺である。外方に広がる口縁を持ち、肩部はわずかに屈曲する。111は球形の体部を持ち、外方に広がる口縁を持つ。口縁端部は外側に折り曲げて肥厚させる。108は壺蓋である。やや高い天井部を持ち、中央がくぼむつまみを持つ。

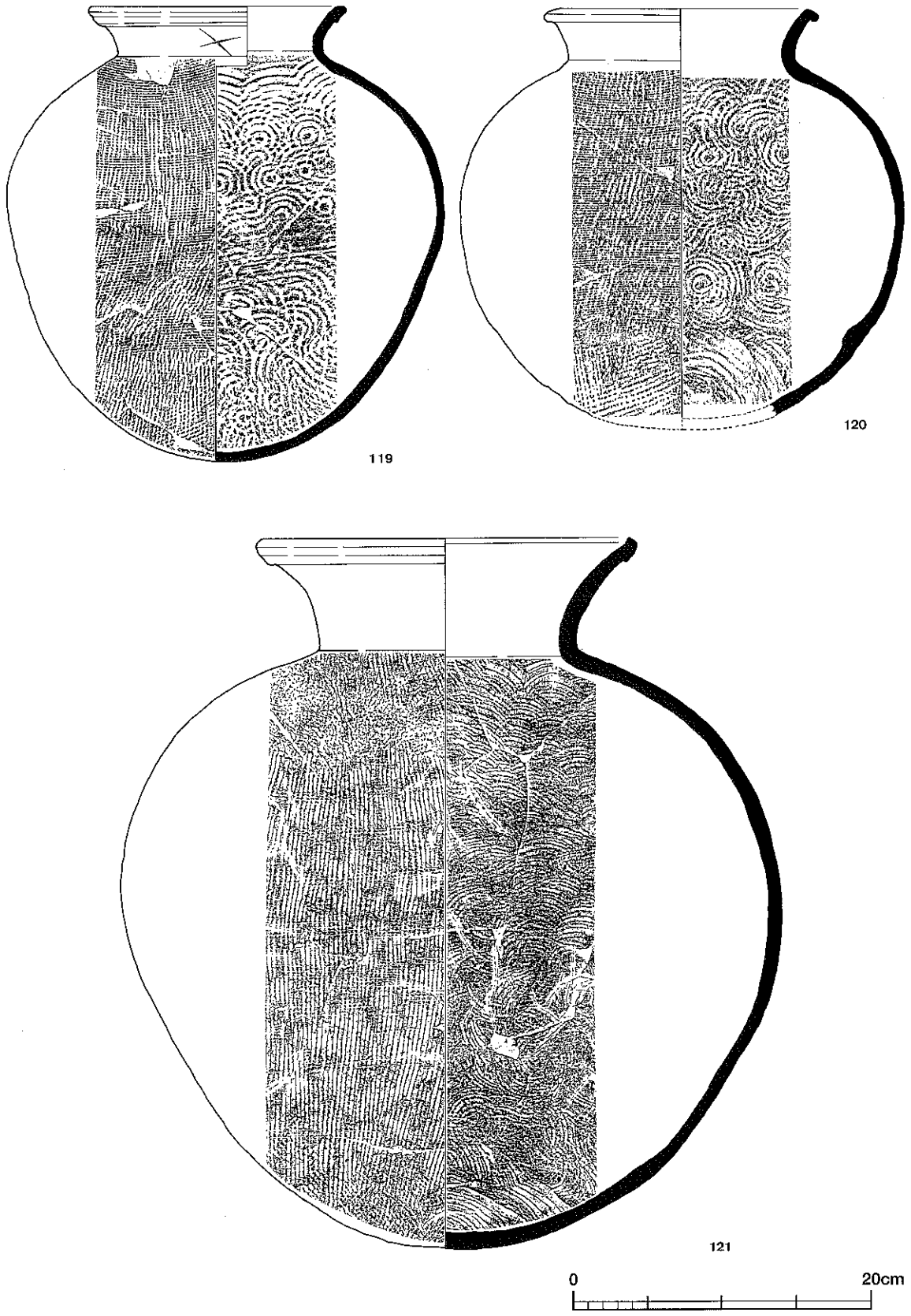
甕 (112・113・114~116) は 4 点を図示した。112は頸部に 2 条の沈線を施し、その間に波状文を充填する。113は、粗いハケ状工具によって縦方向のハケ目を施し、これを装飾としている。その後上部に 3 条、下半に 2 段に 1 条ずつの沈線を施す。器台の脚部の可能性も考えられるが、ここでは甕として報告する。114~116は、いずれもほぼ球形の体部と短い立ち上がりの口頸部を持つ。いずれも肥厚する口縁を持つが、口縁端部の形状は様々である。114は頸部に「×」のヘラ記号を持つ。

これらの須恵器の年代は、最も古いものでは陶邑編年の TK10型式まで遡りうる土器も見られる。しかし古墳時代の土器の主体となるのは、TK209型式の段階のものである。埋葬施設が横穴式石室である可能性が低いことから考えると、SX01の年代は TK209型式の時期に

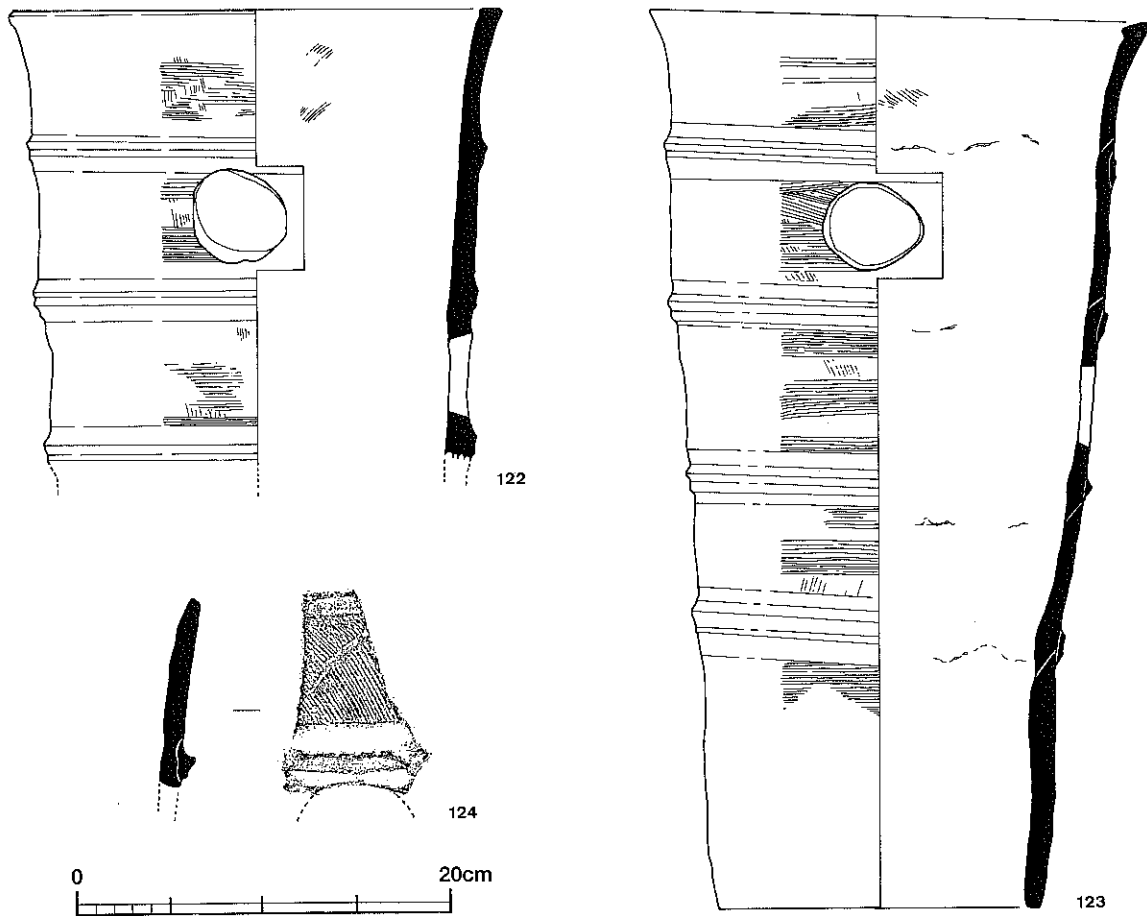




第18図 SX01出土遺物 (須恵器 2)



第19図 SX01出土遺物（須恵器3）



第20図 円筒埴輪

求めるのが妥当であると考え。前述したとおり、古墳の周囲にはTK43型式期の土壙墓などもあり、これらの遺構に伴う土器が流入したものと考えられる。飛鳥時代から奈良時代の土器については、概ね土師器の年代観に対応するものと思われる。

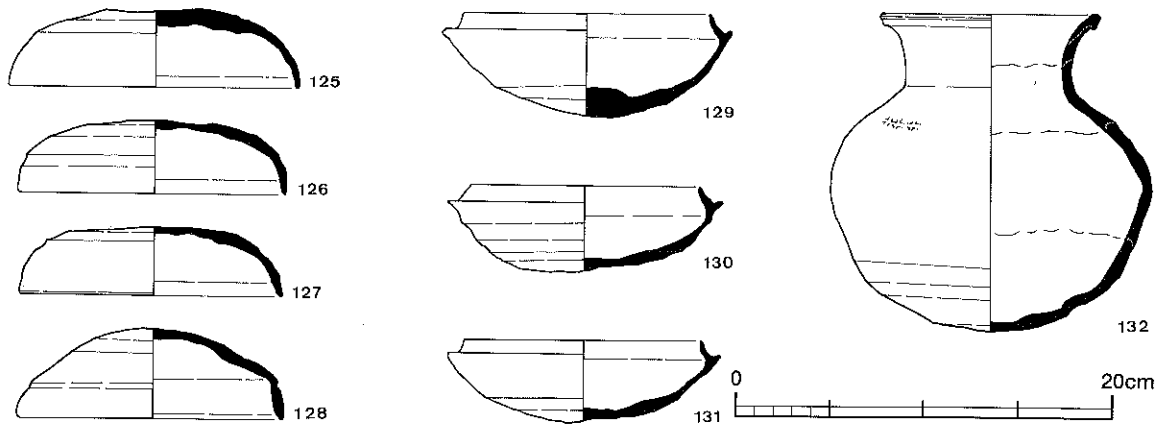
### 2. SX01出土円筒埴輪 (第20図)

円筒埴輪は3点出土している。これらはSX01周溝の南西部溝底から出土した円筒埴輪棺である。118の基底部に117の口縁をはめ込み、118の口縁部には119が蓋をするような形で立て掛けられていた。

117と118は、胎土・焼成・技法共に類似しており、同じ窯で焼かれたものと判断できる。タガは4段で断面形態は低いM字形を呈する。外面調整は1次調整のタテハケのあとc種ヨコハケを施す。色調は黄灰色で焼成は良好である。119は117・118と比較して焼成がやや軟質である。色調は淡赤褐色である。2次調整は行っておらず、1次調整のタテハケのみが残る。

### 3. SK22出土土器 (第21図)

SK22からは杯身3点、杯蓋4点、壺1点が完形で出土している。身の口径は12~13cm、



第21図 SK22出土土器

蓋の口径は13～13.4cmを測る。

壺（127）は外反する口縁を持ち、端部の下部に粘土紐を張り付け肥厚させる。体部はタキによる整形の後、最大径より上位3cmほどの幅にカキ目を施し、その後全体を横ナデによってナデ消している。底部過半はナデ消し後ヘラケズリを施す。体部内面は当て具痕をナデ消している。

これらの特徴から、SK22出土の土器はTK43型式に属するものと思われる。

#### 4. SB02・03出土土器（第22図133～148）

SB02・03からは古墳時代から奈良時代に至る土器が出土している。切り合っている遺構であるため、どちらの住居跡に伴うものか、あるいは埋没時に流入したものか判断しかねる遺物が多い。確実に遺構に伴うものとしては、148の土師器の甕がSB03の焼土中から出土している。

出土した土器には、須恵器の杯・高坏・椀・台付甗・甕、土師器の杯・甕がある。土師器の甕（148）は、口頸部はヨコナデを施し、体部内面に板ナデ。指頭圧痕が残る。体部外面は縦方向のハケを施す。

#### 5. SD04出土土器（第22図149～154）

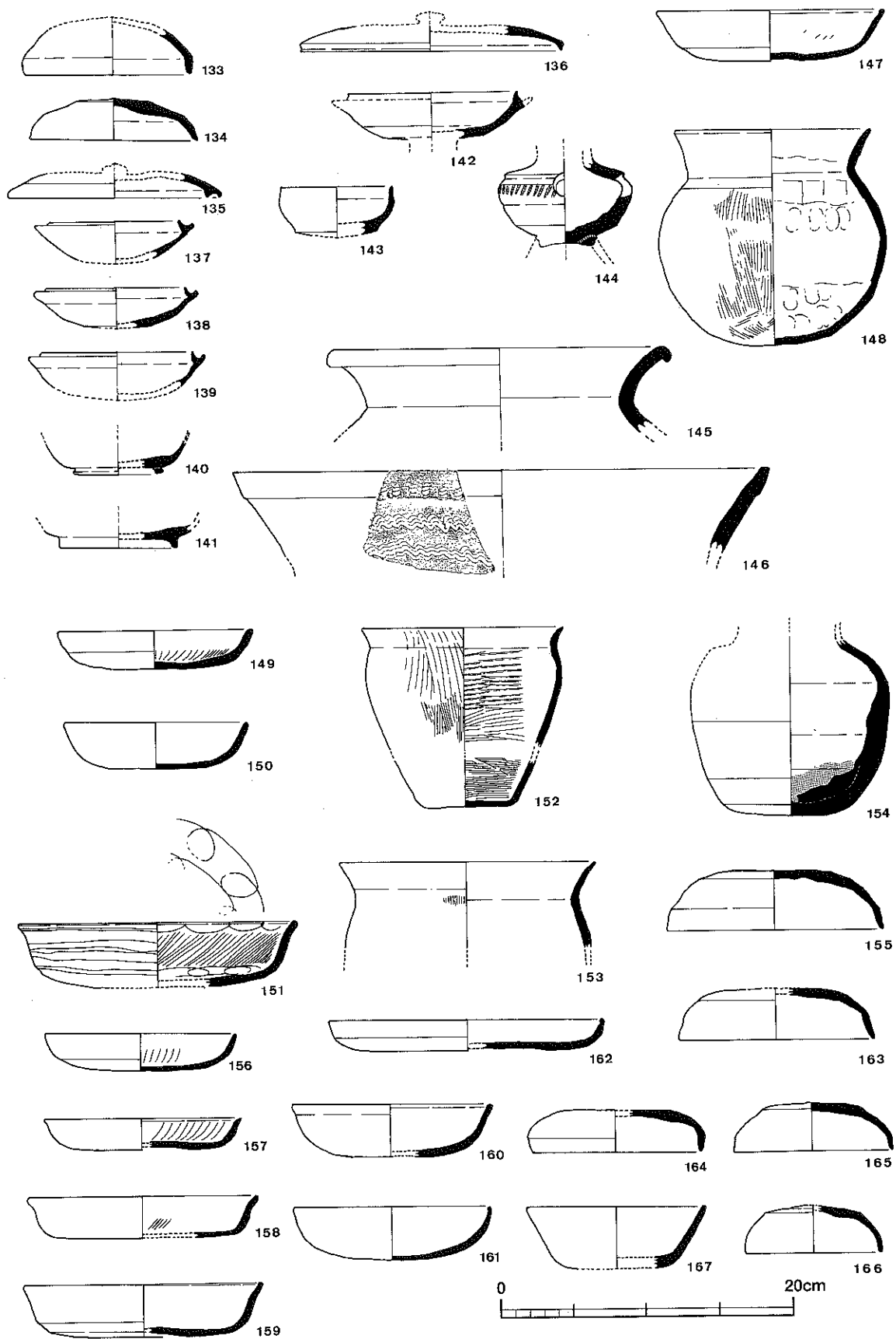
SD04からは土師器の杯、甕、須恵器の壺などが出土している。奈良時代のものが主流を占める。

149～151は土師器の杯Aである。一段放射暗文とラセン暗文を持つものから、暗文を持たないものまでである。152は土師器の平底の甕である。内底面及び体部過半は細かいハケ、体部内面は横方向の粗いハケを施す。外面は縦方向のハケを施す。

154は須恵器の壺である。内面に漆が付着しており、漆を貯蔵していたものであろう。

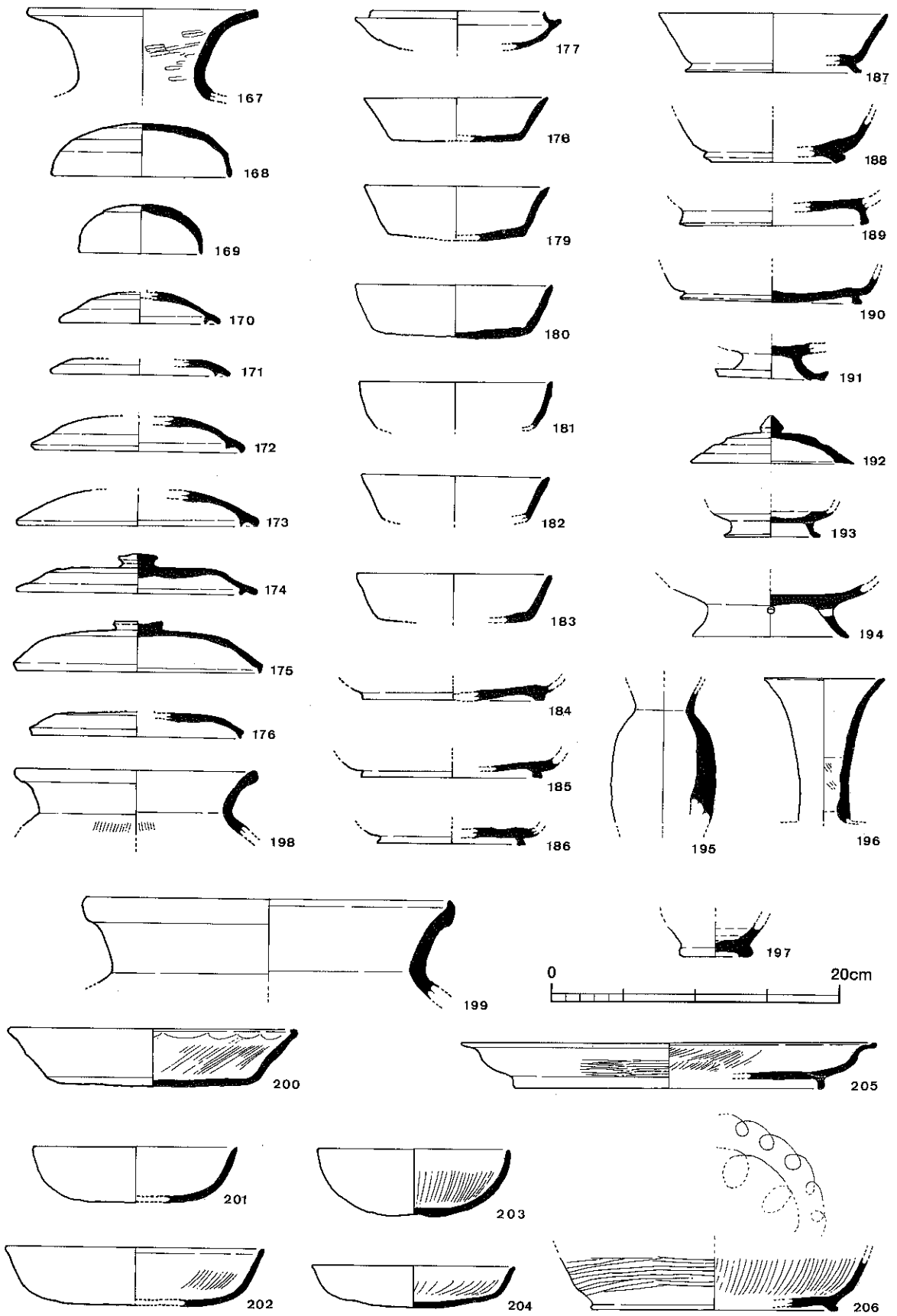
#### 6. SD13出土土器（第22図155～166）

SD13からは須恵器の杯、土師器の杯、皿、椀が出土している。ここでも奈良時代の土器

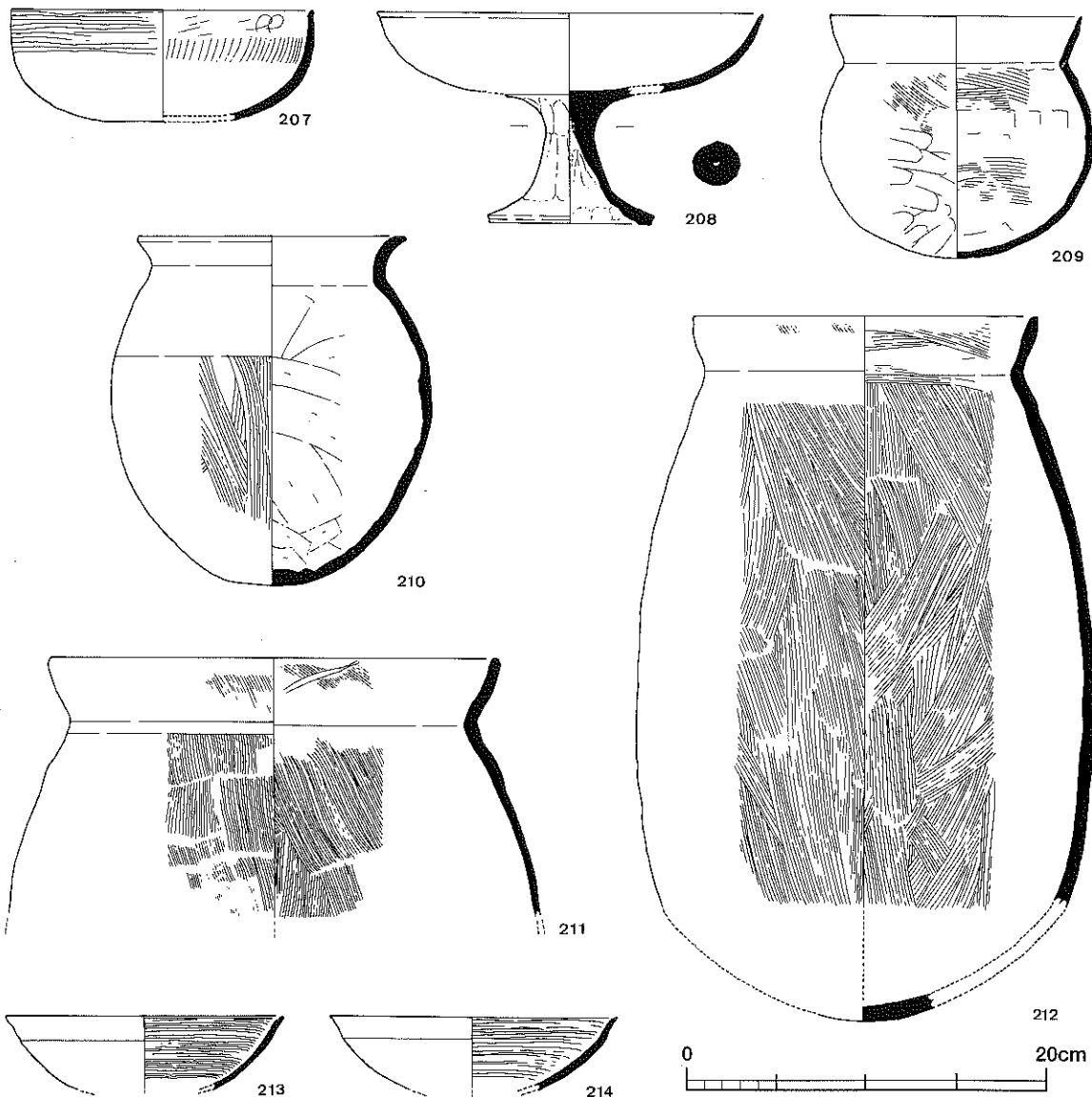


第22图 SB02·03, SD04·13出土遺物

V 遺 物



第23図 出土遺物 (1)



第24図 出土遺物(2)

が主流を占める。土師器の杯Aは一段放射暗文を持つものと持たないものがある。ラセン暗文を持つものは見られない。外面の調整はナデである。皿、椀Aとも暗文は施さない。皿では底部をヘラケズリする。

須恵器では杯H、杯Aがある。

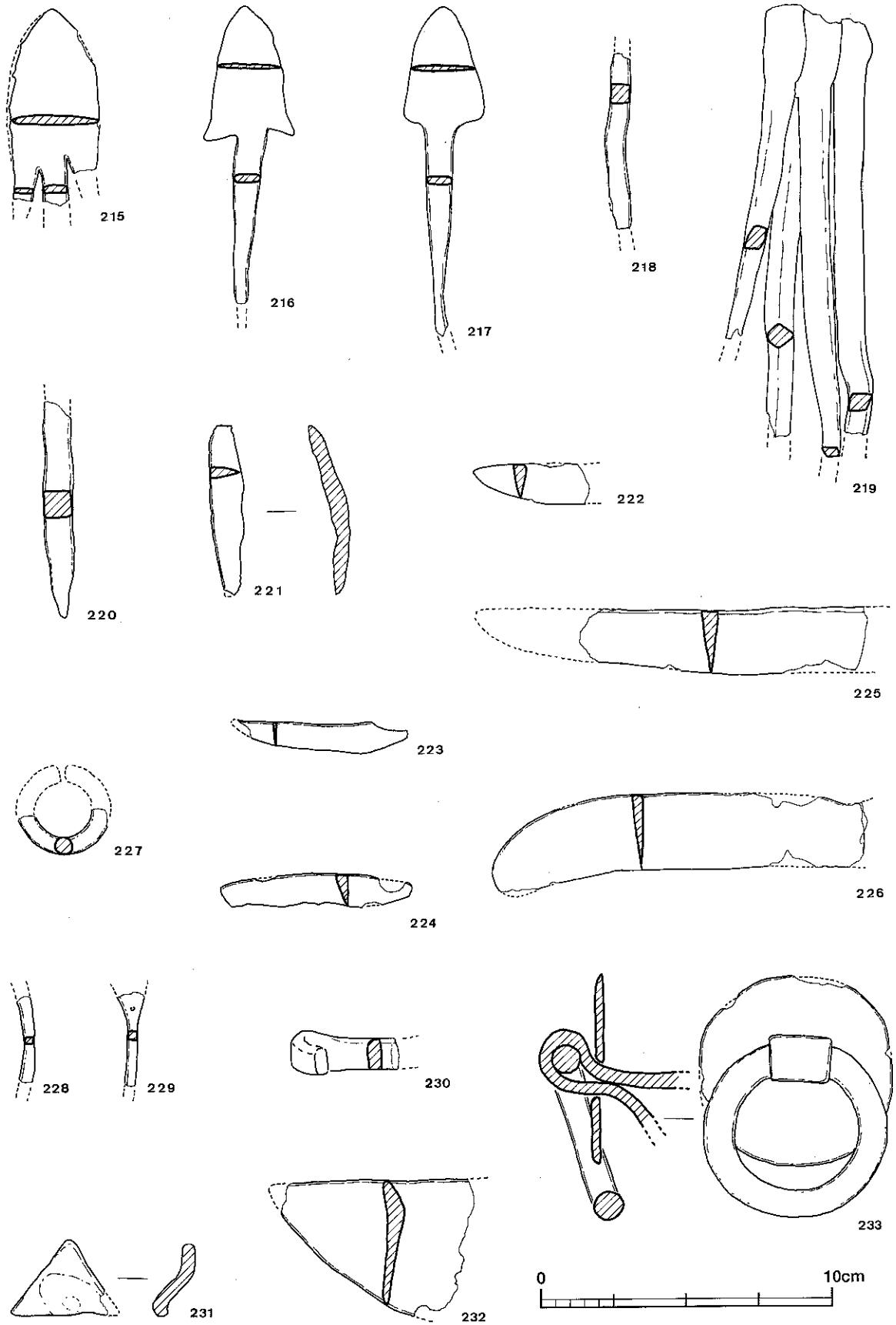
#### 7. その他の土器(第23・24図)

第23・24図は前述した遺構以外、もしくは包含層などから出土した土器である。時代的には弥生時代から中世までのものがある。

167は弥生時代後期の壺である。弥生時代の土器はこの1点のみの出土である。

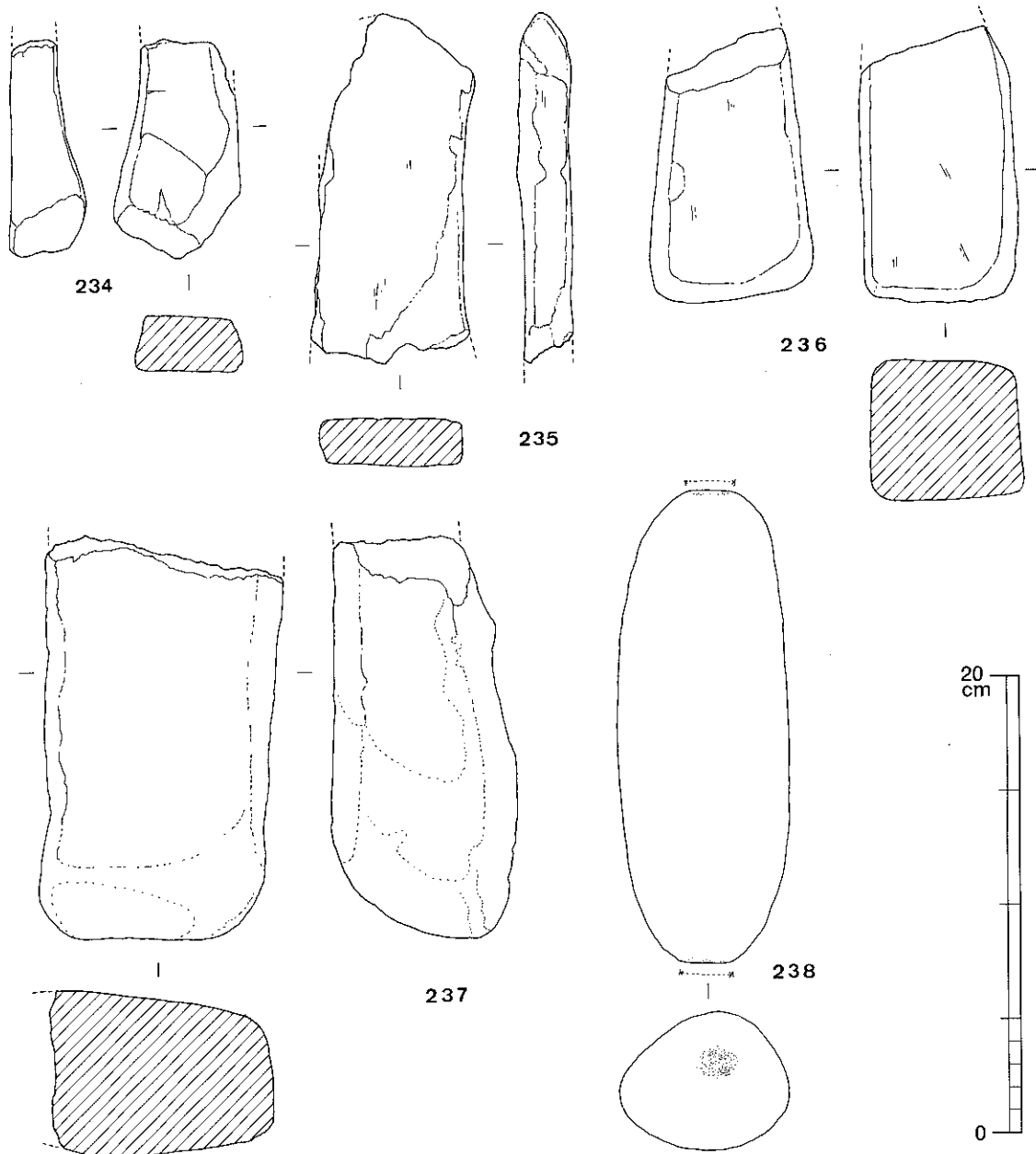
168～190は古墳時代から奈良時代にかけての須恵器の杯である。杯H、杯G、杯A、杯Bがある。このうち175・179・180・182・188は、SD13の西側にあるピット20から一括して

V 遺物



第25図 出土遺物（金属製品）





第26図 出土遺物（石製品）

出土したものである。この他須恵器では、高坏、長頸壺、甕などがある。

土師器では杯A、杯B、杯C、椀A、皿B、高坏、甕がある。

瓦器では椀が出土している。SD02からの出土である。

#### 8. 金属器（第25図）

今回の調査で出土した金属器には、鉄鏃・鉄刀子・鉄鎌・金環・鉄釘・鉄鋸・用途不明鉄製品がある。

鉄鏃は4点ある。鏃身の形状のわかるものは、杉山の分類によれば、<sup>(註24)</sup>215・216は腸袂三角形鏃、217は三角形鏃である。215はSX01から、216・217はSK22から出土した。これらの鉄

鎌は頸部の断面が長方形だが、219は断面が正方形のものである。

鉄刀子(221~225)は5点ある。いずれも折損しており、全形を伺うことはできない。221~224の小型品と、225の大型品の2種類がある。221は刃先が屈曲していることからやりがんなの可能性もあるが、片刃であることからここでは刀子とした。

鉄鎌は1点出土している。曲刃鎌で現存長13.7cm、幅2.6cm。SX01下層から出土。金環は1点出土した。

219は、SK24から出土した鉄釘である。4本が錆で固まった状態で出土した。截頭形の鉄釘で、断面形は方形である。完形のものが1点あり、長さは15.4cmである。

230は断面長方形の鉄棒の先端を曲げたもので、一方の端部は欠失している。鏃と思われる。

228・229・231・232は用途不明鉄製品である。228・229は断面方形の棒状の鉄製品である。239ではバチ状に広がり、その中央に孔を穿つ。231・232は現状では三角形を呈するが、遺存状態が悪いため全形を窺うことができない。

233は把手状金具である。表土直下から出土したため、時期等は明確ではないが、長方形の鉄棒に環を絡ませ、坐金具を通してそれを足としている点など、古い時代のものである可能性を残している。

これ以外にはSX01の周溝内から鉄滓が出土している。

## 9. 石製品 (第26図)

石製品には砥石と磨石がある。234は、バチ形に開く形状をしたもので、上部を欠損している。3面に研磨面をもつ。小口と1側面は自然面である。流紋岩製の砥石で、表採遺物である。<sup>(註25)</sup>235は扁平な泥質ホルンフェルス<sup>(註25)</sup>を石材としたもので、両小口以外の4面に研磨面を持つ。236は方柱状の泥質ホルンフェルス製の砥石で、小口以外の4面に研磨面を持つ。SX01出土。237は閃緑岩製の砥石である。3面に研磨が見られるが、裏面の研磨はごく一部に見られるのみである。

238はSB01から出土した砂岩製の磨石である。両端部に研磨、もしくは敲打の痕跡がある。その他の部分は自然面である。

## VI ま と め

### 1. 且棕遺跡の変遷

今回の調査では、6世紀後半から8世紀に至る遺構を検出した。これらの遺構の変遷をまとめると、大きくは次の3期に分けられる。まず、遺跡が成立する以前の段階（プレ1期）、古墳や土壙墓が形成される段階（1期）、当地が集落となる段階（2期）である。2期についてはさらに細分が可能で、古墳周辺に竪穴式住居を設ける飛鳥時代を中心とする時期（2-1期）と、トレンチ北部にピット・溝が営まれる奈良時代を中心とする時期（2-2期）である。

プレ1期は、名木川の流路が北東から南西に流れ、当地においてもたびたび氾濫を起こしていた段階である。調査においても、トレンチ北半部では赤褐色の大阪層群の粘土層を検出していることから、当時の本流が調査地の南方にあったことは間違いないものと思われる。

1期は、当地が墳墓地になる段階である。最初につくられたのは、土壙墓 SK22であるが、その後 SX01・SX02の墳丘を持つ古墳も築造される。古墳は氾濫によって堆積した砂層上に築造されている。このことから、古墳築造は当地が安定した土地になったため可能になったものと思われる。この原因は、名木川流路の固定、つまりトレンチ北部下層で検出した大溝が掘削されたからと考えたい。

7世紀にはいると、古墳の墳丘を削り、周溝を埋めている（2-1期）。そして古墳の周辺に竪穴住居が造られ、当地は集落域になってくる。しかし古墳の周溝はすべて埋まりきっておらず、窪みになっていたものと思われる。その窪みの中で、移動式カマドを使った煮炊きを行っていたことがわかっている。この段階では、溝は埋められていたものと思われるが、埋めた直後で土地が不安定だったせい、溝の上層ではこの段階の遺構はあまり見られない。

8世紀にはいると、遺跡の中心はトレンチ北部からさらに北側に移ったようで、古墳周辺ではこの時期の遺構がほとんど見られないが、北部に集中してピットや溝が形成される（2-2期）。出土している土器量から見ても、ごく小規模な集落とは考えられず、調査地北側の道路を中心とした大規模な集落があったことが想定できる。

ここで問題となるのは、名木川の流路がどこへ移ったかである。平成4年度に行った且棕神社社殿横での調査では、中世の遺構面の上層に厚く堆積する洪水砂を確認している。この洪水砂層は、且棕神社を再建した16世紀中頃のものと考えられる。この層は、今回の調査地には及んでおらず、また神社の北側にも及んでいないことから、今回調査地と且棕神社社殿との中間の、社殿よりに名木川流路があったものと考えられる。ちなみに現名木川流路に移

## VI ま と め

動した時期は明確ではないが、少なくとも大谷川の付け替えは、同じ平成4年度の調査から中世末もしくは近世初頭と考えられるため、同様の時期と見ていいのではないだろうか。

2期以降の旦棕遺跡は、調査地内では中世の溝1条を検出したのみであるが、周辺の調査では明確な遺構は確認していないものの、平安時代以降の遺物包含層を確認している。これによれば中世に至るまで大きな断絶は認められない。中世、おそらく13世紀代になると、調査地の西側に大久保環濠集落が成立する。調査地内に中世の遺構が稀薄なのは、環濠によって集落とそれ以外が明確に区別されるからであろう。

このような旦棕遺跡の変遷を見る中で、大きな疑問となるのは、なぜ築造からあまり時を隔てていない古墳が削平されたのかということである。城陽市の芝山遺跡では、9基の古墳群が検出されており、このうち少なくとも4基は墳丘を持つ円墳であったと考えられる。芝山遺跡では、飛鳥時代から奈良時代には集落が営まれるが、明らかに古墳を避けて竪穴式住居や掘立柱建物をつくっている。このことから考えると、旦棕遺跡における飛鳥時代の古墳の削平は異常なものと思われる。ここで思い起こされるのは、平城京や長岡京造営の際に破壊された古墳である。つまり平城京における市庭古墳、長岡京における今里車塚古墳・今里庄の淵古墳・舞塚古墳・塚本古墳などである。都の造営という国家的なプロジェクトの前には、古墳といえども単なる障害物にしか過ぎなかったのである。

このような事例から旦棕遺跡の状況を考えると、古墳を破壊してまでも、集落をこの地に移動しなければならなかった要因があったものと思われる。そこで考えられるのが、『日本書紀』に見える栗隈大溝の記事である。栗隈大溝については後に詳述するが、この大溝の掘削によって、古墳時代後期までの集落域が水田になり、墓域であった場所に集落を移動せざるを得なくなったのではないだろうか。

もう一つの問題は、栗隈大溝の掘削記事に見える「栗隈県」との関係である。従来地名などからの検討では、現在の旦棕神社の前身が栗隈天神社であったことから、調査地周辺に「栗隈県」、あるいは「栗隈郷」をあてることが一般的であった。しかし、考古学からの検討では、久津川古墳群や平川廃寺・久世廃寺などの遺跡の所在から、栗隈県主の本貫地を現在の城陽市北部に見ることが一般的である。このことは、これまで宇治市城南西部の調査が行われておらず、遺跡の実態が明らかでなかったことが一番の原因であったと思う。近年八幡市の内里八丁遺跡など、これまで実態の不明であった沖積地での集落遺跡が調査されるようになってきた。これらの成果によれば、古墳時代中期以前の集落に関しては、これまで栗隈の中心と考えられてきた大久保や平川より大規模な集落が沖積地に発見されており、集落の変遷や地域の捉え方を再考せざるを得ない状況になってきている。今後沖積地を含めた集落遺跡の検討を行う中で、文献とのすりあわせを行う必要があるだろう。

(註)

- 1) 佐藤良二「第6章 芝ヶ原遺跡出土の石器類」『芝ヶ原遺跡発掘調査報告書』1980 芝ヶ原遺跡調査会
- 2) 「森山遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財報告書』第6集 1977 城陽市教育委員会、「森山遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財報告書』第12集 1983 城陽市教育委員会
- 3) 「芝ヶ原古墳」『城陽市埋蔵文化財報告書』第16集 1987 城陽市教育委員会
- 4) 『京都府城陽市上大谷古墳群の調査—発掘調査概要—』1979 (財)元興寺文化財研究所
- 5) 山田良三「山城宇治一本松古墳調査報告」『古代学研究』42・43 1966
- 6) 「西山古墳群発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報』1964 京都府教育委員会
- 7) 「尼塚古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1969 京都府教育委員会
- 8) 「庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第15集 1990 宇治市教育委員会
- 9) 鐘方正樹「宇治市一里山出土の古式円筒埴輪」『京都考古』第44号 1987
- 10) 小池寛「南山城地域の後期古墳の様相—城陽市・長池古墳を中心として—」『京都府埋蔵文化財情報』第40号 1991 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 11) 「坊主山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1965 京都府教育委員会
- 12) 「芝山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第25冊 1987 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 13) 近藤義行「久世廃寺」『京都府埋蔵文化財情報』創刊号 1981 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 他
- 14) 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 1973 城陽市教育委員会 他
- 15) 「広野廃寺平成2年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第17集 1991 宇治市教育委員会
- 16) 「正道官衙遺跡」『城陽市埋蔵文化財調査報告』第24集 1993 城陽市教育委員会
- 17) 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』(小林行雄博士古希記念論文集) 1982
- 18) 出土層位は、上層(1~12・16~19・27・29・30・34・37~39・42・44・47・48)、下層(13~15・20~26・28・31~33・35・36・41・43・45)、おきカマド(39・40)に分けられる。
- 19) 園下多美樹「爪形状圧痕」を有する須恵器『京都考古』第67号 1992
- 20) 『飛鳥・藤原京発掘調査概報』22 1992 奈良国立文化財研究所
- 21) 『飛鳥・藤原京発掘調査概報』8 1978 奈良国立文化財研究所
- 22) 『飛鳥・藤原京発掘調査報告』II 1978 奈良国立文化財研究所
- 23) 須恵器の編年については、田辺昭三の陶器編年(『陶器古窯址群』1)を使うこととする。
- 24) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏝について」『橿原考古学研究所論集』第八 1988 吉川弘文館
- 25) 石材については京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏の教示による。
- 26) 「旦棕遺跡第2次発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第20集 1993 宇治市教育委員会

## Ⅶ 考 察

### 1. 宇治市出土の土師器甕についての覚書

土師器甕は、古代において日常生活の中で煮沸という重要な機能を有していたものである。それとともにこれらは供膳形態と比較したとき作成者の個性が反映されやすいという特色を有している。小笠原好彦氏は、後者の特色に注目し製作技法・口縁部形態により旧国単位の地域色をもつことを指摘した。<sup>(註1)</sup>以後の研究もこの視点をもとに行われているといえる。

今回の旦椋遺跡の調査では、6世紀後半から8世紀にかけての土師器甕・鍋・甑が出土した。近年の宇治市域の調査においても、特に6世紀後半から7世紀にかけての全形のうかがえる良好な資料が蓄積されつつあり、当該期の様相を知ることが可能になってきている。また最近の調査ではカマド内より小型の甕が逆さに伏せた状態で出土する例がみられ、甕の使用形態との関連が問題になってきている。このことから本節では、6世紀後半から7世紀にかけての宇治市域出土の土師器甕を集成し、特に煮沸機能の検討という視点から見てみたい。

#### A. 宇治市域の土師器甕

6世紀後半から7世紀にかけての土師器甕は、旦椋遺跡のほかに西浦遺跡<sup>(註2)</sup>・寺界道遺跡<sup>(註3)</sup>・隼上り遺跡<sup>(註4)</sup>・羽戸山遺跡<sup>(註5)</sup>・広野遺跡<sup>(註6)</sup>・塔ノ川遺跡<sup>(註7)</sup>・隼上り1号墳<sup>(註8)</sup>・隼上り3号墳から出土している。これらの遺跡の内容をみると日常容器として使用された集落遺跡から出土するほかに、古墳の副葬品や甕棺としても使用されていることがわかる。しかし塔ノ川遺跡の甕棺や隼上り1号墳・隼上り3号墳の副葬品のように表面にススが付着しているものは、日常容器として使用されたものを転用したものと思われる。そのためこれらは、集落遺跡出土のものと同様に煮沸機能をもつと考えて大過なからう。

宇治市出土の土師器甕は、旦椋遺跡 SX01の成果を参考にすると法量・形態から4つに分類できる。それぞれの特徴をまとめると以下ようになる。(法量表は第27図)

[甕A]：長胴・丸底のもの。法量によってA I・A IIの二つに分かれる。

[甕B]：球胴・丸底のもの。把手をもつことが多い。

[甕C]：球胴・丸底のもの。

[甕D]：口径と器高があまり変わらない小型・球胴・丸底のもの。

次に宇治市域出土の土師器甕類について簡単に見ていきたい。

①西浦遺跡 第2次調査において竪穴住居 SB01から当該期の甕が出土している。この住居からは、カマドにかかった状態で甕A Iが、カマド横の P116より甑とともに甕B 1点・甕D 2点が出土している。甕A Iは内湾する口縁部をもち、内外面ともハケ調整、甕Dは2点

ともに外面下半部をヘラケズリする。この両者はヘラ記号をもつ。またA地点では甕A I 2点および甕A II 1点・甕D 1点がまとまって出土している。いずれも内外面ハケ調整を施す。出土状況から甕棺の可能性はある。

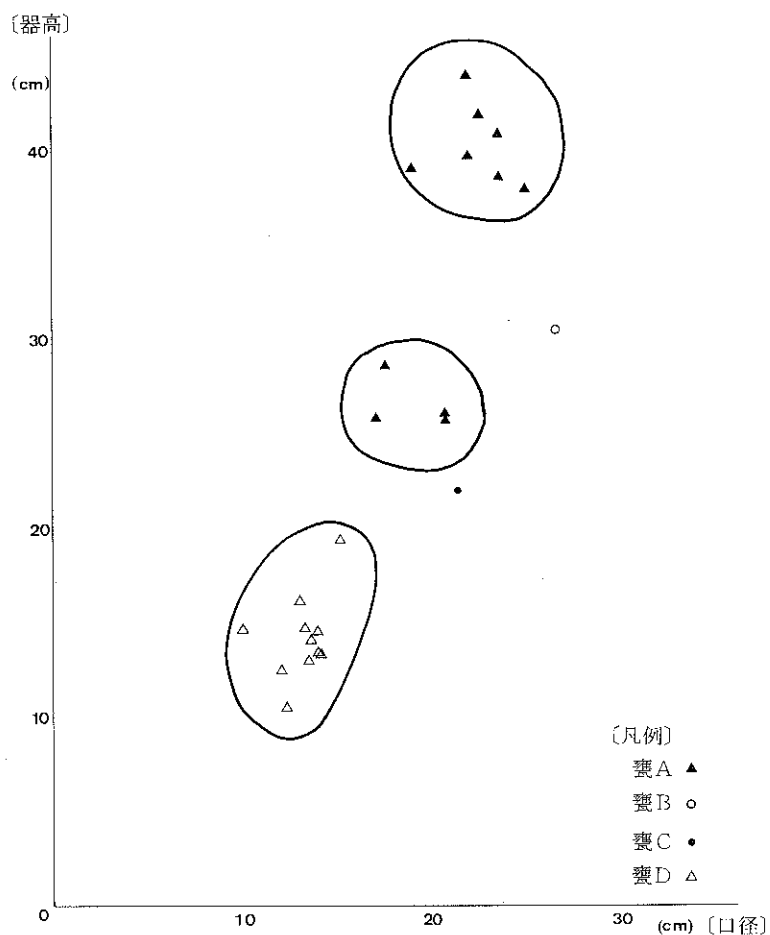
②寺界道遺跡 6世紀後半の竪穴住居2棟、土壌などが検出されている。また一部の掘立柱建物は当該期に存在していたようである。SB05（カマドSX11を含む）では甕A I 1点・甕A II 1点・甕D 1点が出土している。甕A I・IIはいずれも内湾する口縁部をもち、内外面ともにハケ調整を施す。甕Dは体部最大径より小さく直立する口縁部をもち、外面下半はヘラケズリする。SK03からは甕Dの小片が3点出土している。またSK09からは甕A・甕Dの口縁部小片各1点および甕1点が出土している。後者は外反する口縁部をもち、内外面ともにハケ調整を施す。今後の資料の増加を待つて再分類する必要がある。

③隼上り遺跡 隼上り瓦窯の工房跡の掘立柱建物に伴う炉SX18より甕Bが上半部のみ出土している。<sup>(註9)</sup>内湾する口縁部をもち、体部外面には線状にナデ消した痕跡を残す。把手は貼り付けであり、下面には3条の切り込みをもつ。

④羽戸山遺跡 竪穴住居SB02より甕A IIが出土している。内湾する口縁部をもち、外面下半はヘラケズリする。

⑤広野遺跡 広野廃寺創建以前の集落遺構として竪穴住居4棟を検出している。そのうちSH08のカマド内からは甕Dが伏せた状態で検出された。またSH06の炉の横からは甕Dが伏せた状態で検出された。SH08の甕Dは外面をハケ調整し、内面を板状工具によりなでる。また口縁部内面にヘラ記号を有する。SH06の甕Dは外面下半をヘラケズリする。

⑥塔ノ川遺跡 平等院小御所より甕棺SX02が検出されている。甕棺に使用され



第27図 宇治市出土土師器甕法量表

た土器は甕A I 1点・甕A II 1点である。いずれも内湾する口縁部をもち、甕A Iは内外面ともハケ調整、甕A IIは外面下半をヘラケズりする。このほか宇治市街遺跡（宇治壺番46）<sup>(註10)</sup> 整地層からも甕A Iが2点出土している。

⑦隼上り1号墳・隼上り3号墳 ともに横穴式石室を内部主体とする古墳である。隼上り1号墳では玄室西側袖部付近より甕とともにも甕A I 1点・甕A II 1点が出土している。報告書では「追葬等の際に動かされたものだろう。」とされている。出土した須恵器はTK43・TK209・TK46型式とされている。追葬時に動かされていることから、土師器甕はTK43～TK209型式の所産と考えられる。これらはいずれも内湾する口縁部をもち、内外面ともハケ調整を施す。隼上り3号墳では石室内より甕D、周溝より甕A Iが出土している。出土した須恵器から土師器甕はTK209型式の所産と考えられる。甕Dは内湾する口縁部をもち、内外面ともハケ調整、甕A Iは、外反する口縁部をもち、外面下半をヘラケズりする。<sup>(註11)</sup>

以上の土師器甕の特徴は、小笠原氏の設定された「近江型」のそれとほぼ一致する。<sup>(註11)</sup> このことから当該期の宇治市域は「近江型」の分布範囲に入ると言える。これらの甕は集落遺跡において日常容器として使用されるほかに、古墳の副葬品や甕棺としても使用されている。次にこれらの甕の使用形態を使用痕跡の検討を通してみたい。

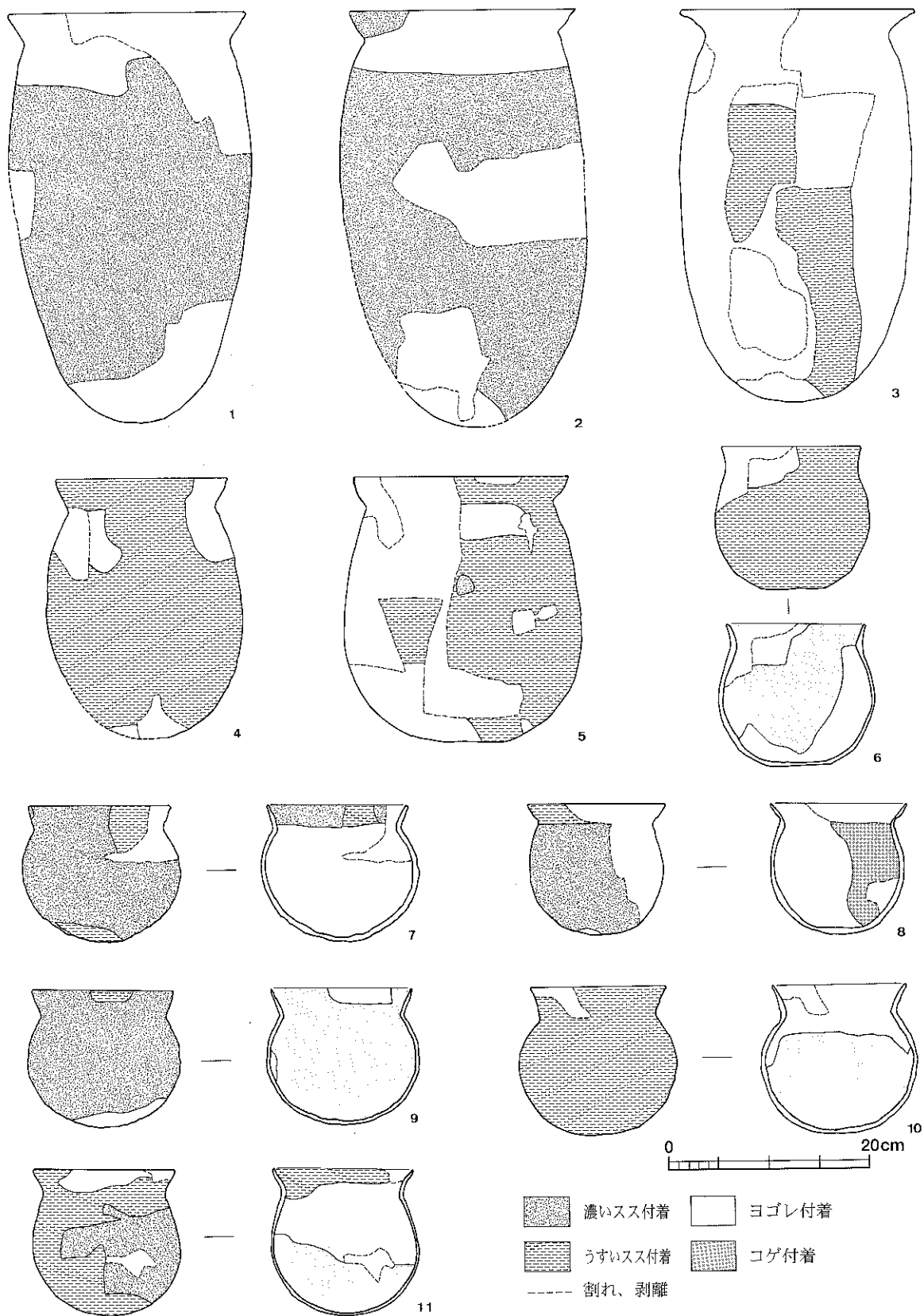
#### B. 宇治市出土土師器甕の使用痕跡の検討（第28図）

土師器甕などの使用形態の検討は、弥生土器や布留式土器および東日本の古墳時代後期～平安時代の土器において行われている。これらの研究では、①外面のススの付着状況と内面の付着物の観察から使用形態を推定する、②使用状況を示す出土状態の資料と使用痕跡との対比を行う、といった作業が行なわれ、炉とカマドにおいて使用された土器の使用痕跡の違いが明らかになっている。<sup>(註12)</sup> しかし西日本の古墳時代後期以降の土器についてはあまり検討されていないように思える。そこで本節では、宇治市出土の土師器甕のうち、使用痕跡の判明するものを用いて使用形態の検討を行うことにしたい。<sup>(註13)</sup>

まず土師器甕に認められる使用痕跡の整理を行いたい。外山政子氏によれば外面に残される使用痕跡は①ススの付着②繰り返して行われる加熱によって生じた器面の変化（一般的に赤化）と器面の剝離③粘土の付着があるとされる。<sup>(註14)</sup> これらのうち③は宇治市出土の資料に認められない。そこで①②を図示することにした。このうち①については濃淡が存在することからトーンの濃淡で表現することにした。次に内面についてはA. 炭化状のこびりつき<sup>(註15)</sup> B. ヨゴレ C. 器面の剝離があるとされる。これらのうちCは依存状態の悪い資料では使用時のものか廃棄後のものか判別できないことからここでは除外している。そこでA・Bをトーンの濃淡により図示することにした。

次に図示した遺物の事実関係について記載する。甕A（1～5）は5点図示した。1は図





第28図 宇治市出土土師器甕の使用痕跡図

1. 西浦遺跡土器群B 2・4. 隼上り1号墳 3. 隼上り3号墳 5. 羽戸山遺跡 SB02 6. 広野遺跡 SH08  
 7・8. 西浦遺跡 SH01 9. 且椋遺跡表採 10. 且椋遺跡 SB03 11. 且椋遺跡 SX01西カマド

示した面の底部の状況が示されていないが残存している部位を観察するとススの付着は認められない。また口縁部にもススの付着は認められず体部のみに付着が認められる。2は1と同じ様相を示すものの口縁部の一部にススが付着するものである。3は体部全周の1/4にススが付着する。4は底部を除く部分にススが付着するものである。図示できなかったが口縁部内面の一部にもススが付着する可能性がある。5は残存状態が悪く確定的ではないものの体部の赤変化と口縁部・底部に薄いススの付着が認められる。このほか図示していないものに塔ノ川遺跡 SX02甕棺・宇治市街遺跡整地層出土のものがある。前者は1と同様に体部外面のみにススの付着が認められる。後者は外面にわずかにススの付着が認められ、内面には口縁部から体部にかけてヨゴレが付着する。

甕Bは、且椋遺跡 SX01・隼上り遺跡 SX18出土のものがあるがともに顕著な使用痕跡を残していないため図示することができなかった。

甕Cは、口縁部の残存度が低いため図示しなかった。且椋遺跡 SX01のものは、甕Aと同様の使用痕跡を示す。

甕D（7～12）は6点図示した。外面のススの付着状況は底部を除く全面に付着するもの（9）のほかは全面にススの付着するものである。底部のススはその他の部分に比して薄く付着するようである。内面は、口縁部から体部にかけてヨゴレの付着するもの（9）、体部にヨゴレの付着するもの（7）、体部にコゲの付着するもの（8）、体部にヨゴレの付着するもの（10）、口縁部にスス・体部にヨゴレの付着するもの（11）が存在する。

#### C. 宇治市域出土甕の使用形態についての予察的考察

前節でみてきた甕の使用痕跡をみると、大まかに分けて二通りの残りかたがあることがわかる。ひとつは外面のススが口縁部までおよぼず、内面に付着物のないもの（甕AⅠ・C）、もうひとつは外面全面にススが付着し、内面にヨゴレまたはコゲが付着するもの（甕AⅡ・甕D）である。両者のちがいは、従来の研究においても指摘されているように前者がカマドのような構築物を、後者は炉のような構築物をもたないものを火処として考えることができる。これは甕Dの口縁部内面にススの付着するものが多いのに対して、甕AⅠにはススの付着が顕著でないことから首肯されよう。

ここで問題になるのはカマドの中や焼土の中から口縁部を下にした状態で支脚状に据えられて出土する甕Dの存在である。宇治市域では広野遺跡 SH08の甕D（6）、SH06の甕D、且椋遺跡 SX01の甕D（11）、SB03の甕D（10）といった例がある。これらは出土状況から考えると支脚として使用された可能性が考えられる。<sup>(註16)</sup> またいずれの甕も二次焼成を受けた痕跡が顕著でないことからカマド廃棄に伴う祭祀の痕跡の可能性もある。<sup>(註17)</sup> しかしこれらの用途では、外面の赤変化やススの付着といった現象がみられても、内面に使用痕跡を残すことは

考えられない。以上のことから甕Dは、実際の炊事の場合において使用され、その後に支脚あるいはカマド祭祀に用いられることがあったと考えられる。そして使用痕跡から見てその火処は炉であったと思われる。

杉井健氏によれば日本の造り付けのカマドには大きくわけて西日本の一つ掛けと東日本の二つ掛け横並びの二つの地域性があるとされている。<sup>(註18)</sup>東日本ではカマドに長胴甕二つあるいは長胴甕と小型の甕をかけ隙間を粘土で埋めて煮炊きに用いるとされている。<sup>(註19)</sup>この場合、カマド一つで2種類のを同時に調理することができる。それに対して西日本ではカマドの掛け口が一つであるため東日本と同じ量を調理しようとするとう甕を掛け直す必要が出てくるため2倍の時間がかかることになる。すなわちカマドのみでは調理の際の効率が非常に悪いことになる。

先に宇治市域では甕A・Cのようにカマドにおいて使用されるもののほかに甕Dのように炉において使用されていたと想定できるものが存在することを示した。一住居内の煮炊具のセット関係を見ても、西浦遺跡SB01の例ではカマド横の収納ピットより甕・把手付きの鍋のほかに甕D 2点が、カマドにかかった状態で甕A 1点が出土している。<sup>(註20)</sup>以上のことから宇治市域では実際の調理においてカマドに甕を一つしか懸けられない部分を補うため、カマドとは別に炉のような火処において甕Dを用いて調理をしていた可能性が考えられる。しかし竪穴住居内においてカマド以外に炉のような火処を想定することが現状では困難である。ここではカマドの焚口の前でオキを利用して炊事を行っていた可能性を考えておく。

以上のように宇治市域出土の甕には4種類の器形があり、長胴の甕Aおよび把手付きの甕B・中型の甕Cはカマドにおいて使用され、小型の甕Dは炉のような火処において使用されていることを示した。これらの甕は、6世紀後半から7世紀にかけての宇治市域の竪穴住居において使用されたセットであると言える。先にこれらは「近江型」と呼ばれていたものであることを示した。<sup>(註21)</sup>以上のような「近江型」のセットと「掘立柱建物で移動式カマドの文化圏」との関連が今後問題となるであろう。この問題については「近江型」の分布範囲との関連から今後検討していきたい。

(註)

- 1) 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27-2 1980
- 2) 「西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第21集 1993 宇治市教育委員会
- 3) 「寺界遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 1987 宇治市教育委員会
- 4) 「雫上り瓦窯跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第3集 1983 宇治市教育委員会
- 5) 「羽戸山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第2冊 1982 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 6) 「広野庵寺平成2年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第17集 1991 宇治市教育委員会
- 7) 『平等院庭園発掘調査概要報告』1993 宗教法人平等院
- 8) 『京都府遺跡調査報告書』第7冊 1987 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

Ⅶ 考 察

- 9) 田中勝弘「いわゆる近江型土師器に関する二・三の問題」『史想』第20号 1984 京都教育大学考古学研究会 小笠原好彦「古代の近江型土師器甕と二つの特徴」『滋賀県文化財だより』82 1984
- 10) 「宇治市街遺跡（宇治壱番4 6）発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第16集 1990 宇治市教育委員会
- 11) 且原遺跡 SX01・広野遺跡 SH08の甕Dは、内面を平滑になでている。これらは、年輪のない方の面を用いてなでたものと理解できるため、基本的にハケ調整と同様に理解できる。
- 12) 藤田至希子「古墳時代前期の煮沸形態について―矢部遺跡を中心に―」『矢部遺跡』1986 外山政子「群馬県地域の土師器甕について」『研究紀要』6 1989（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団、外山政子「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から―古墳時代を中心にして―」『長根羽田倉遺跡』1990、外山政子「三ツ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊」『三ツ寺Ⅱ遺跡』1991 外山政子「炉かカマドか―もうひとつのカマド構造について―」『研究紀要』6 1992（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団など
- 13) 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター所蔵分の実見に際しては松井忠春氏の手を煩わせた。
- 14) 註12文献など
- 15) 註14に同じ
- 16) 広野遺跡 SH08では甕の底部上面に別の甕の破片が2点乗せられており高さ調整のためと思われる。
- 17) 寺沢知子「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『同志社大学考古学シリーズ 考古学と生活文化』1992 寺沢氏のいうa類の「杯伏せ型」に類似する。
- 18) 杉井健「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 1993
- 19) 註12文献。
- 20) 註2文献
- 21) 巽淳一郎・黒崎直「道具の組合せ」『図解・日本の人類遺跡』1992 第四紀学会

## 2. 旦棕遺跡と栗隈大溝

今回の調査では、トレンチ北端部の下層から東西方向に流れる流路跡を検出した。この流路については、調査の最終段階において検出したため詳細な調査ができていないが、流路の肩がほぼ垂直に落ちていること、周辺の地層がグライ化していないことなどから、自然流路とは考えられない。そして、ほぼ底面に近い層から6世紀後半代と思われる須恵器片が出土していることから、この流路が6世紀から8世紀以前に機能していたことは間違いがない。本来この周辺の川の流れは、SX01に残された洪水層の方向から判断すると、北西から南東に向かっていたものと考えられるため、上記の流路は古墳時代のどこかの段階で人工的に付け替えられた流路とみることができる。

このような状況から想起されるのが、『日本書紀』に記載のある栗隈大溝である。冒頭に述べたように、栗隈大溝は仁徳紀と推古紀の2回にわたって記載があり、古墳時代中期にさかのぼり得るかは問題であるが、前述した遺跡の変遷と時代的に合致しているからである。

**A. 研究史** 栗隈大溝については、古くは江戸時代から考証が行われている。江戸時代の地誌『山域名勝志』や『山域名跡巡行志』では、城陽市長池の集落の北東にある堤跡をこれにあてている。次いで吉田東伍は『大日本地名辞書』において、寺田の西にある一渠（古川）を大溝と考え、これは本来木津川から水を引き入れていたものが木津川の流路の変化に伴い、本流から切り離されたものと考えた。

奥野健治は、『万葉山代志考』<sup>(註1)</sup>において、前記の長池説・古川説のいずれについても否定的な見解を示したが、「其に更るべき推定地を有するにあらず」とし、強いてあげるならば長池西方の荒見神社付近に推定できるとした。

この栗隈大溝について、始めて学問的に詳細な検討を行ったのは谷岡武雄<sup>(註2)</sup>である。谷岡は古川を栗隈大溝と考えたが、その根拠として①古川北部の流路が久世郡の条里の界線に沿って直線的に流れていることから、古川が人工の流路であること、②古川の流路沿いに、式内旦棕神社の旧社地と伝承される場所があることなどをあげている。そして古川は木津川の旧流路を開削したもので、仁徳期には灌漑用水路として、推古期には灌漑用水及び舟運用の水路として改修されたものとした。

谷岡の唱えた栗隈大溝古川説は、現在でも有力な説の一つであるが、これに対する異論もいくつか提示されている。足利健亮は、長池から久津川まで断続的に続く堤跡に着目した<sup>(註3)</sup>。つまり栗隈大溝は、扇状地の縁辺部に築かれた堤防であり、ここに丘陵から流れ出る小河川の水を溜めて灌漑用水にしたものと考えた。これとはほぼ同様の説を竹村俊則もとっており<sup>(註4)</sup>、古老の談として、「栗隈の大溝とは、……中略……南は長池から水を引き、寺田・久世・平川・大久保・伊勢田の各村々を経て……中略……末は巨棕池にそそいでいたとつたえる。」そし

てその補助のため山麓に貯水池が作られ、その水を大溝に通じてさらに西方の低地に向かって用水路をつくったものとしている。

また杉本宏は、平川古墳群の位置から、平川古墳群の造営に当たっては大谷川の付け替えが必須であるとし、大谷川を栗隈大溝にあてる見解を提示している。<sup>(註5)</sup>

これらの研究を整理すると、栗隈大溝の比定地は①長池、②水主付近の水路、③古川、④長池から久津川までのびる堤防、⑤大谷川の5説となる。

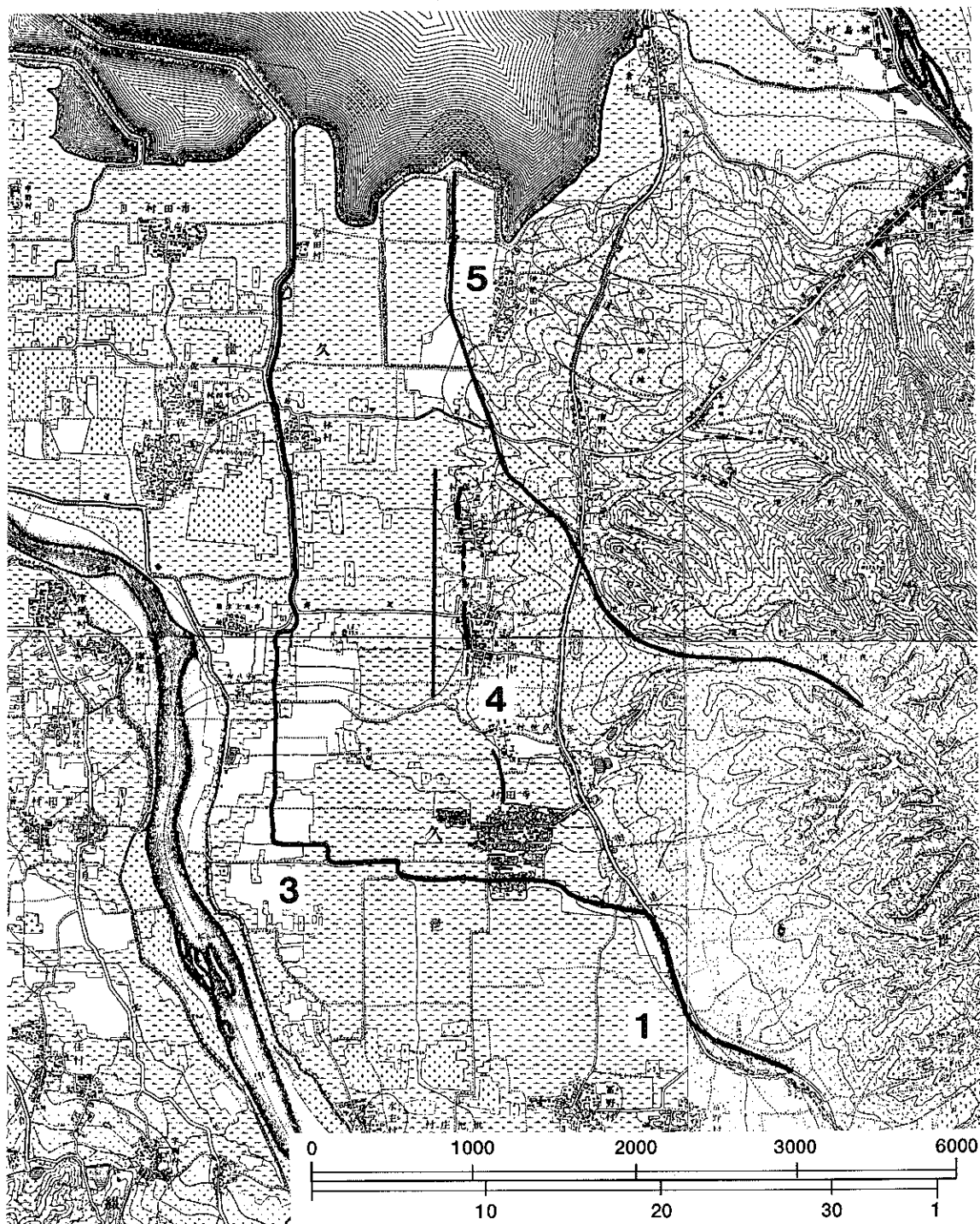
### B. 古墳時代から飛鳥時代の地形的環境

これらの説を検討してみると、①ではなぜ「池」ではなく大溝という表現がされているかが説明できない。②では、このような小規模な水路が敢えて国史に記載されるかが問題となろう。③・④については後述するとして、⑤については、平成4年度の旦椋遺跡の発掘調査で確認した大谷川の氾濫層が、中世以降に形成されていることが明らかとなったため、大谷川の付け替えは中世以降である可能性が高い。このことから、⑤の説も成り立ちがたい。残るは③・④の説であるが、この2説を検討する前に栗隈大溝が想定されている地域の古墳時代から飛鳥時代にかけての地形的な環境を考えてみたい。

南山城地域の沖積平野部は、乙訓地域などに比べて考古学的調査の少なかった地域である。しかし近年わずかながらではあるが調査が行われてきており、沖積平野部での遺跡の状況が少しずつ分かり始めてきた。これによれば、現況から判断すると、起伏のほとんど見えない平坦な土地と思われていた地域が、少なくとも中世以前にはかなり細かい起伏のある土地であることが明らかになった。そして島状の微高地上に住居域を、その縁辺部に水田を形成するパターンが一般的に認められる。

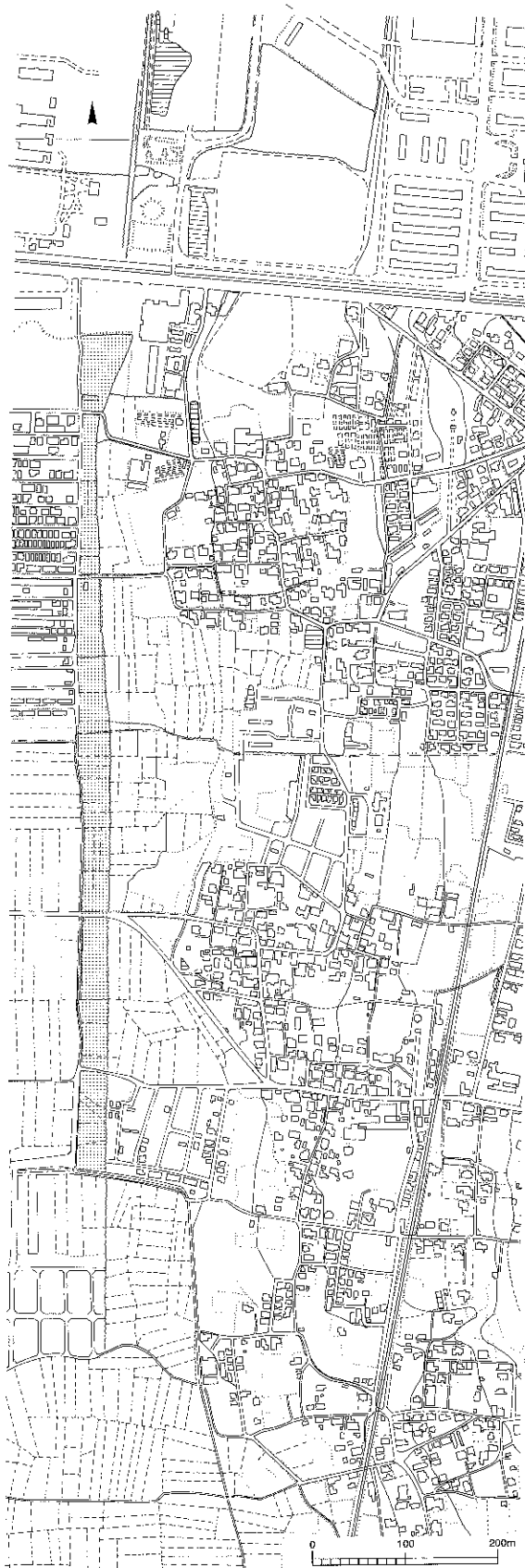
木津川右岸の場合、考古学的な調査がほとんど行われていないため明確ではないが、土地条件図などによると木津川沿いや古川沿いに断続的に自然堤防が認められる。また、久御山町域では、やはり木津川沿いや木津川の旧流路沿い、そして現集落が自然堤防や微高地となっている。しかし、これまでの断片的な調査成果では、木津川沿いの自然堤防は、中世以降の氾濫によるものが多く、古墳時代以前までさかのぼり得るものではないようである。近年明らかになってきた古墳時代前期集落の立地は、木津川や古川の周辺にある自然堤防ではなく、東西に流れる中小河川の形成した自然堤防である可能性が高い。そしてこれらの集落は、現状では古墳時代中期まで継続するものが見られない。

このような地形的環境の理解から、改めて③・④の説を検討してみる。ここで問題となるのは、国史に残るほどの大規模な土木工事を行って、一体どこを灌漑したのかという点であろう。現在徐々に明らかになりつつある古市大溝などの調査例などを見ると、一般的な古代の開発が行われた場所は低位の段丘上のようなのだが、木津川右岸の地域では低位段丘は多く



第29図 栗隈大溝の諸説

が扇状地性の堆積物に覆われており、開発適地にはなっていない。このことは木津川右岸の中で最も広い面積を持つ大谷川の扇状地で見ると、大部分が集落や墳墓地として利用されており、耕地として開発された場所ではなかったことが分かる。次に木津川に沿って存在する自然堤防であるが、これも新しい時代の氾濫によって形成されたものであるならば、新たに開発された場所とは考えにくい。そうであるならば、大溝を掘削して新たに灌漑される地域



第30図 地割にみる溝状区画

としては、扇状地端部から木津川までの沖積地に求められるべきであろう。

このように考えると、③の古川は西に偏りすぎているきらいがある。近世の段階においても古川の水は灌漑に利用されているが、流域の上津屋・久世・安田などで利用されているにすぎない。その点では④の堤防説が最も妥当と思われるが、長池から大久保の間にはいくつかの流路が認められる。これらの流路は、古代においては深い谷を形成していた可能性がある。宇治から城陽にかけての丘陵から流れ出る小河川は、丘陵の基盤が礫層であることから、通常は涸れ川で出水時には大量の土砂を押し流す。こうした河川に堤防を造りそれを維持することは困難ではないだろうか。

### C. 文献における「溝」の掘削記事

『日本書紀』などの文献に現れる古代の「溝」の掘削記事は、全部で5件ある。それは、裂田溝・栗隈大溝・感玖大溝・石上溝で、栗隈大溝のみ2回の掘削記事がある。このうち感玖大溝については、栗隈大溝と同じ「大溝」の標記があり、詳細な記載があるため、詳しく見てみたい。

『日本書紀』によれば、感玖大溝は、石川から水を引いて、上鈴鹿・下鈴鹿・上豊浦・下豊浦の4か所を灌漑したという。そしてその結果四万余頃の田を得たという。この感玖大溝は、1967年に発見された「古市大溝」との関連も含めた様々な議論があったが、現在のところ児玉泰・原秀禎の提唱した大阪府羽曳野市の唐白水路にあてる説が有力である。



ここで問題としたいのは、同じ大溝と表現された感玖大溝の灌漑面積である。『日本書紀』に記載された四万余頃は約80町歩で、実際の唐臼水路の灌漑面積も約85町歩であるという。そうすると栗隈大溝の灌漑面積もこの数字が一つの目安となってこよう。

感玖大溝に次いで記載が多いのは裂田溝である。この溝は、神功皇后が神田に那賀川から水を引くために開削したものとされる。裂田溝は現在の福岡県那賀川町に裂田神社があり、この地に比定されている。石上溝は栗隈大溝同様開削したことが記されているのみで、詳しい内容はわからない。しかし布留遺跡の調査で石上溝の可能性があるとされる溝が検出されている。<sup>(註6)</sup>この溝は幅約15m、深さ約2mで、5世紀末に掘削されたものである。溝の方向からみると、布留川から水を引いたものと思われる。このように見てみると、古代の灌漑用水は基本的には川から水を引くこと、低位段丘から沖積地にかけての地域を灌漑していること、総延長が2から3km程度であることがわかる。

#### D. 栗隈大溝に関する予察

上記の検討から翻って、栗隈大溝に関して検討してみる。前項の検討では、いくつかの問題はあるものの、④の堤防説が最も妥当であることを述べた。しかし文献での検討から考えると、長池から大久保に至るような長大な堤防が果たして構築されたかは疑問である。感玖大溝で見たように、大溝と呼ばれる灌漑水路であっても、さほど広い面積を灌漑していたわけではないのである。

そこで栗隈郷に比定されている大久保周辺について、航空写真や地図などで検討すると、大久保から城陽市の平川にかけて条里地割の東端に接して、幅10～40m、長さ1.3kmにおよぶ溝状の区画が見て取れる。また足利が堤防説の根拠の一つとした平川の大洲池についても、地形に従って蛇行しながら大久保まで続く細長い地割を見ることができる。これらの地割は、大久保以北では戦時中の京都飛行場の造成によって大きく地形が改変されているため、追うことができないが、現在のところこのいずれかが栗隈大溝にふさわしいのではないかと考える。

これらの地割は、いずれも扇状地端部に位置し、湧水を確保したものと考えられる。また、これらの地割は平川集落の南で痕跡が途絶えるが、ここには古代における大谷川旧流路が想定でき、大谷川からも水を引いていたことも考えられる。

この想定は、考古学的に立証されたものではないし、久世郡条里の施工時期など問題も多く残っている。しかし、この位置に栗隈大溝を想定するのが現時点では最も合理的であると考える。今後の発掘調査を待ちたい。

Ⅶ 考 察

(註)

- 1) 奥野健治『萬葉山代志考』1946
- 2) 谷岡武雄「第三節 巨椋池周辺の開拓」『宇治市史』1 1973 宇治市役所
- 3) 足利健亮「京都盆地東縁の南北古道」『探訪古代の道』第三卷 1988
- 4) 竹村俊則『昭和京都名所圖會』南山城 1989
- 5) 杉本宏「4. 宇治二子山古墳とその周辺」『宇治二子山古墳発掘調査報告』1991 宇治市教育委員会
- 6) 『天理参考館報』3 1989 天理大学付属天理参考館

報告書抄録

ふりがな	あさくらいせきだいいちじはつつちょうさがいほう							
書名	旦棕遺跡第1次発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	荒川 史・橋本勝行							
編集機関	宇治市教育委員会							
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地 0774-22-3141							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさくらいせき 旦棕遺跡	京都府宇治市 大久保町山ノ内 3-1	26204		34度 52分 6秒	135度 46分 37秒	19911216 1 19920319	770	市営住宅 建設
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
旦棕遺跡	古墳・ 集落	古墳～奈良	古墳・竪穴式住居跡・ 溝・土壇	須恵器・土師器・鉄器・ 石器・弥生土器・瓦器				